

小・中・高等学校を通じた英語教育強化に関する取組について

- 英語教育については、日本再興戦略、教育再生実行会議等における英語教育改革の指摘を踏まえ、平成26年度から改革の方向性を先取りした取り組みを開始。これらの政府提言を受けて、昨年9月にとりまとめていただいた「英語教育の在り方に関する有識者会議」報告の指摘も踏まえつつ、今後、①カリキュラム開発、②教材開発、③研修、④養成、⑤英語力調査、⑥ALT等の充実など学校の支援体制の充実など、次期学習指導要領改訂に向けた取り組みを順次、実施。
- 外国語WGにおいては、これらの取組の中から論点に沿って、今後の方向性の議論の参考に資する取組状況、検証結果から把握された成果・効果、課題などを適宜報告。

1. 英語教育強化地域拠点事業における取組状況（中学校）・・・・・・・・・・ 2
2. 福井県勝山市の取組事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
3. 学校法人光華女子学園 京都光華中学校における取組事例・・・・・・・・ 14
4. 外部専門機関と連携した英語指導力向上事業・・・・・・・・・・・・ 15
 における取組状況（高等学校）
5. 宮城県石巻高等学校における取組事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
6. 静岡県立沼津西高等学校における取組事例・・・・・・・・・・・・・・ 26
7. 京都市立紫野高等学校における取組事例・・・・・・・・・・・・・・ 27
8. 英語教育強化地域拠点事業における取組状況（高等学校）・・・・・・ 28

平成27年度 英語教育強化地域拠点事業における取組状況（中学校）

1. 調査の目的

- 英語教育強化地域拠点における研究の取組状況を把握し、現時点の成果・効果や課題を分析した上で関係者が情報を共有し、強化地域拠点や研究指定校の今後の研究の充実に資する。
- 具体的な取組の状況について調査し、次期学習指導要領の改訂に向けた中央教育審議会における議論の参考とし、今後の施策の検討に資する。

2. 調査の対象・期間

※本事業は平成26年度より4年間実施予定

- 調査対象
英語教育強化地域拠点事業 研究指定校 52校／52校
- 調査期間
平成27年10月15日～平成27年10月27日
- 主な調査項目
 - ①小学校・中学校・高等学校の接続や一貫性を意識した取組に関すること
 - ②小学校・中学校・高等学校の連携及び互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う対話的な言語活動の充実など、指導の工夫・改善のための取組に関すること
 - ③学習評価方法の工夫・改善のための取組に関すること 等

3. 主な取組状況

- (1) 小学校・中学校・高等学校の接続や一貫性を意識した取組
 - 一貫したカリキュラムの作成
約半数の中学校で校種を超えて一貫したカリキュラムを作成。
そのうち、半数を超える中学校が「小・中学校一貫」のカリキュラムを作成している。
「小・中・高等学校一貫」のカリキュラム作成校は少数にとどまる。
 - 一貫した学習到達目標や指導計画の作成
半数を超える中学校で校種を超えて一貫した学習到達目標や指導計画を作成。
そのうち、半数を超える中学校が「小・中・高等学校一貫」の学習到達目標や指導計画を作成している。
- (2) 小学校・中学校・高等学校の連携及び互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う対話的な言語活動の充実など、指導の工夫・改善のための取組
 - 小学校・中学校・高等学校の連携
ほとんどの中学校で情報交換、授業参観、研修会・協議会等による校種間の連携を行っている
 - 小学校外国語教科化を踏まえた取組
ほとんどの中学校が英語の授業の半分以上を英語で行い、ほぼすべての中学校が小学校における外国語の教科化を踏まえた取組を検討。
そのうち、具体的内容として多くの中学校が「考えを英語で伝え合う言語活動の充実」
「教科書の題材・言語材料を生徒の身近な話題と関連付けた指導」を検討している。
- (3) 学習評価方法の工夫・改善のための取組
すべての中学校が学習評価方法の工夫・改善を行っており、ほぼすべての中学校がパフォーマンス評価を実施。
そのうち、ほとんどの中学校がスピーチ、インタビュー（面接）に代表される「スピーキングテスト」を実施している。

4. 主な調査結果分析

(1) 小学校・中学校・高等学校の接続や一貫性を意識した取組

- **48.1%の中学校が校種間で一貫したカリキュラムを作成**していると回答。
うち、64.0%の中学校が小・中学校一貫のカリキュラムを作成し、36.0%の中学校が小・中・高等学校一貫のカリキュラムを作成している。
- **57.7%の中学校が校種間で一貫した学習到達目標や指導計画を作成**していると回答。
うち、56.7%の中学校が小・中・高等学校一貫の学習到達目標や指導計画を作成し、36.7%の中学校が小・中学校一貫の学習到達目標や指導計画を作成している。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- **小中合同教科部会を開催し、小中9年間の系統性をよく検討しながら4領域すべてにおける9年間の学習到達目標を作成した。**また、それを基に互いの指導計画を見つめ直し、特にコミュニケーション活動の場面や言語材料、4領域における指導事項の3点に関わって反復的・発展的に指導することができるように互いの指導計画を改善した。
- **小中通してのCan-Do形式の到達目標を設定することで、必然性のある単元ゴールの設定ができるようになり、小中の連携がよりよくできるようになってきたとともに、小・中・高等学校を通しての到達目標への取り組みの足がかりができた。**
- **小学校・高等学校の授業を参観することで、コミュニケーションの楽しさを実感させる授業づくり、また、将来的に自信を持って英語使用ができる生徒を育てたいとの目標ができ、実践的なコミュニケーションの場面を想定して、言語活動を仕組むようになった。**

〈課題〉

- **中学校入学時に、英語が得意な生徒と不得意な生徒の二極化が進んでいるので、目標の到達にばらつきがある。**
- **さらに小・中・高等学校の連携を深め、小学校卒業時と中学校一年時、及び中学校卒業時と高等学校一年時の学習到達目標や学習内容について、接続の系統を明確にして学習内容の不要な重複や逆転がないか検討を進める必要がある。**
- **連携校とは情報交換ができるが、学校選択制を導入している地区の学校においてはそれぞれの小学校での指導内容を十分把握することが難しい状況にある。**

(2) 小学校・中学校・高等学校の連携に関する取組

- 情報交換（100%）、授業参観（96.2%）、研修会・協議会等（96.2%）による校種間の連携は多くの中学校で行われている。
- 57.7%の中学校が相互の乗り入れ授業を行い、26.9%の中学校が交流授業の取組を行っている。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- 何度も小学校・中学校合同の教科部会を開催して指導計画や指導方法の交流をしてきた。また、互いの授業を参観し児童・生徒の姿の共有も図ってきたが、結果として小学校・中学校9年間の指導を一貫させる土台を築くことができたと感じている。
- 小学校教員に週一回授業に入ってもらうことで、中学生がどこでつまづくのか、何に困難さを感じているのか知ってもらうことができた。
- 小学校と中学校の連携を深めるために教員を小学校の授業支援のために毎日派遣し、小学校の英語教育の理解を深めることができた。また、直接小学生を対象に授業を行ったことで英語授業における中1ギャップの解消につながることを期待できる。
- 中学3年の授業に高校の英語教師が週1時間入り、生徒理解・生徒観察に効果があると感じている。

〈課題〉

- 連携の必要性は感じているが、部活指導、学級経営、生徒指導等で多忙の中、小学校との連携を考える時間もなく授業をこなしてしまっている現状がある。
- 「乗り入れ授業」や「交流授業」等、授業における「人の交流」の必要性を強く感じている。互いの指導内容や指導方法を熟知している教師が相互に行き交い、チーム・ティーチングで実践することができる授業を定期的に行いたい。
- 異校種間の教員による指導は、機会が多いとは言えない。中学校教員の小学校授業への参加、高校教員の補習授業への参加はあるが、小学校教員が中学校の授業に参加する機会がほとんどないのが実情である。



校種間の連携に向けた時間の確保が課題

(3) 互いの考えや気持ちなどを英語で伝え合う対話的な言語活動を充実するための取組

- 26.9%の中学校が英語の授業をおおむね（75%程度以上）英語で行っており、63.5%の中学校が英語の授業の半分以上を英語で行っている。
（参考：平成26年度英語教育実施状況調査では「おおむね英語で行っている」と「半分以上英語で行っている」の合計が48.9%）
- 98.1%の中学校が小学校における外国語の教科化を踏まえた取組を検討しており、そのうち、92.2%の中学校が「考えを英語で伝え合う言語活動の充実」、84.3%の中学校が「教科書の題材・言語材料を生徒の身近な話題と関連付けた指導」を検討している。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- 言語活動の活性化を図るために、音声を中心とした指導法を心がけ、英語による授業を推進していくことで、英語の「音」になれてきた生徒が多くなった。
- 英語で行うことを基本とする授業を実践することにより、生徒の発話量を増やすと共にインタラクティブな言語活動を充実させることができてきている。
- 生徒に関連の深い場所・人物・出来事などを扱うことで、必然性のある場面や内容を設定できるようになってきている。
- ほぼ英語で授業をしているので、生徒たちもより抵抗なく英語を聞けるようになってきており、ALTと会話をするようになった生徒、海外に興味を持ち国際交流で英語を使えるようになりたいと思う生徒、また外部試験等を受検する生徒が増えた。
- 授業中の教員の英語発話が増えるほど、生徒の聞く態度もよくなり、全体的に集中して聞けるようになった。

〈課題〉

- 単元ごとのタスク中心（スピーチ・プレゼンテーション・ディスカッション等）の学習到達目標を設定しているが、タスク以外の身近な話題について即興で話すチャットタイム等についても系統性を持った学習到達目標が必要である。
- 自分の考えを伝えようとする意欲は見られるが、正確さの指導の必要性を感じる。また、相手の立場を考えた表現力の育成も課題となっている。
- 教員による英語のアウトプットと生徒による英語のアウトプットの比率は、教員の方が多い現状である。教員がファシリテーター役になれるよう、生徒の発話量の多い授業に展開していく必要がある。

〈4〉学習評価方法の工夫・改善のための取組

- すべての中学校が学習評価方法の工夫・改善を行っており、98.1%の中学校がパフォーマンス評価を実施し、82.7%の中学校が活動観察を実施している。
- パフォーマンス評価を実施している中学校のうち、98.0%の中学校がスピーキングテストを実施し、72.5%の中学校がライティングテストを実施している。
- スピーキングテストを実施している中学校のうち、88.0%の中学校が「スピーチ」、84.0%の中学校が「インタビュー（面接）」、62.0%の中学校が「プレゼンテーション」の形態で評価をしている。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- パフォーマンス課題に取り組ませることにより、既習の内容を活用することを楽しむ姿が見られる。その過程で言語材料の定着につながったり、新たな表現と出会ったりするなど、主体的な学習の機会となっている。
- 市内のALTの多くに協力を仰ぎ、生徒一人一人に対して面接形式でインタビューテストを行ったが、本校のALT以外の外国人と、英語のみで意思疎通ができたことに、ほとんどの生徒が振り返りカードに「楽しかった」と回答した。
- 筆記テストで力を発揮できない生徒が、プレゼンやスピーチで力を発揮し、クラスメートとの相互評価により自信をもつことにつながっている。
- スピーキング及びライティングによる自己表現活動を増やすことにより、生徒自ら自分たちが伝えたいことを英語で伝えようという姿勢が高まってきている。

〈課題〉

- 限られた年間授業数の中で、パフォーマンステストに取り組む時間がどうしても不足する。
- パフォーマンス評価が効果的であることは実感しているが、学年ごとに実施しているため、学校全体としてのバランスや系統性などについて整理する必要がある。
- パフォーマンステストとペーパーテストの評価比率をどうするべきかということや、パフォーマンステストによる指導内容が高校入試で問われる力と合致するのかということが不安である。

(5) 中学校外国語の全体に関する記述〈抜粋〉

〈成果・効果〉

- 「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」における**生徒の目指す姿を、「内容」「方法」「程度」の側面で明確にさせることができた**からこそ、**年間や単元の指導計画を改善することができた**のだと感じている。また、生徒の「実態」「学習状況」「定着状況」を見届ける際にも、学習到達目標から明らかにした本単元・本時で目指す姿を基準にして見届けることができるため、**日々指導の改善を図ることができている**。
- 学校全体でも「学びの質を高め、心が響きあうコミュニケーション」をテーマに研究をスタートし、理論研究・実践を続けている。この結果、**各教科等でコミュニケーションを図る態度スキル、情報伝達の方法とともに、より良い集団づくりを意識している**。
- 英語教育の高度化を意識した授業実践を行うことにより、**生徒たちの授業への意欲・関心が高まっている**。定期テスト等の結果を見ても、学力下位層の割合が少なくなり、学力上位層の割合が徐々にではあるが、増えてきている。スピーキング及びライティングによる自己表現活動を増やすことにより、**生徒自らが自分たちが伝えたいことを英語で伝えようという姿勢が高まってきている**。
- 英語教育を推進するに当たり、**学校長自ら主導的立場を取っているのが大きな推進力になっている**。

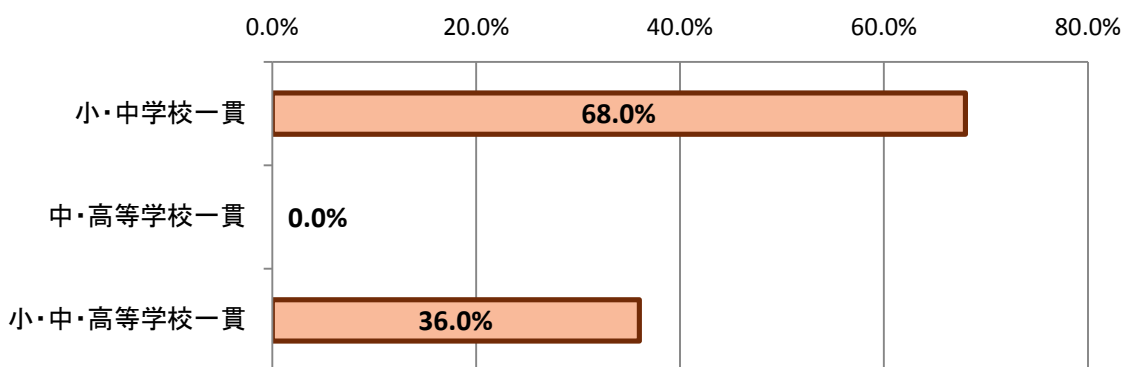
〈課題〉

- 特に小中を一貫させた指導を目指してきているが、実際のコミュニケーション活動において、児童・生徒にどんな「内容」を表現・理解させるのか、つまり、**各単元の中心となるコミュニケーション活動の場面設定についてはさらに検討し合い、改善していく必要がある**。
- 小学校で学習したことが中学校で生きることが生徒に実感されたり、中学校の学習成果が高校で生きることが実感されるような**スパイラルな学習指導や教材を工夫したり、活用したりする必要がある**。
- 英語を学ぶために学ぶのでなく、自分の思いや考えを伝える手段として学ぶ生徒の興味を持っている話題が狭く、**より社会性のある事柄に目を向けさせる必要がある**。
- 定期的に行っているパフォーマンステストだが、**客観的な評価をいかに行うかというところに課題がある**。

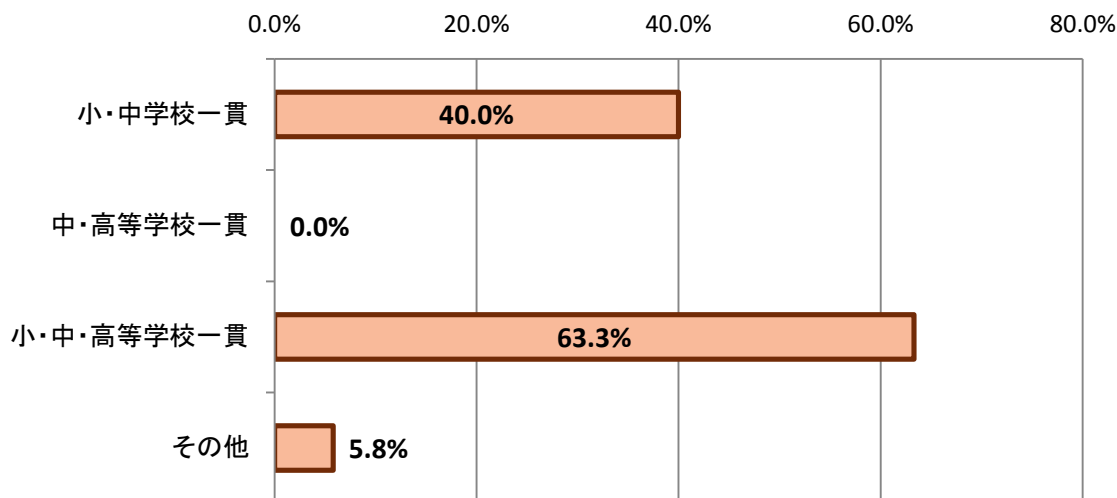
小学校・中学校・高等学校の接続や一貫性を意識した取組

1. 48.1%の中学校が校種間で一貫したカリキュラムを作成している
2. 57.7%の中学校が校種間で一貫した学習到達目標や指導計画を作成している

1.校種間で一貫したカリキュラムを作成していると回答した中学校の取組の詳細



2.校種間で一貫した学習到達目標や指導計画を作成していると回答した中学校の取組の詳細



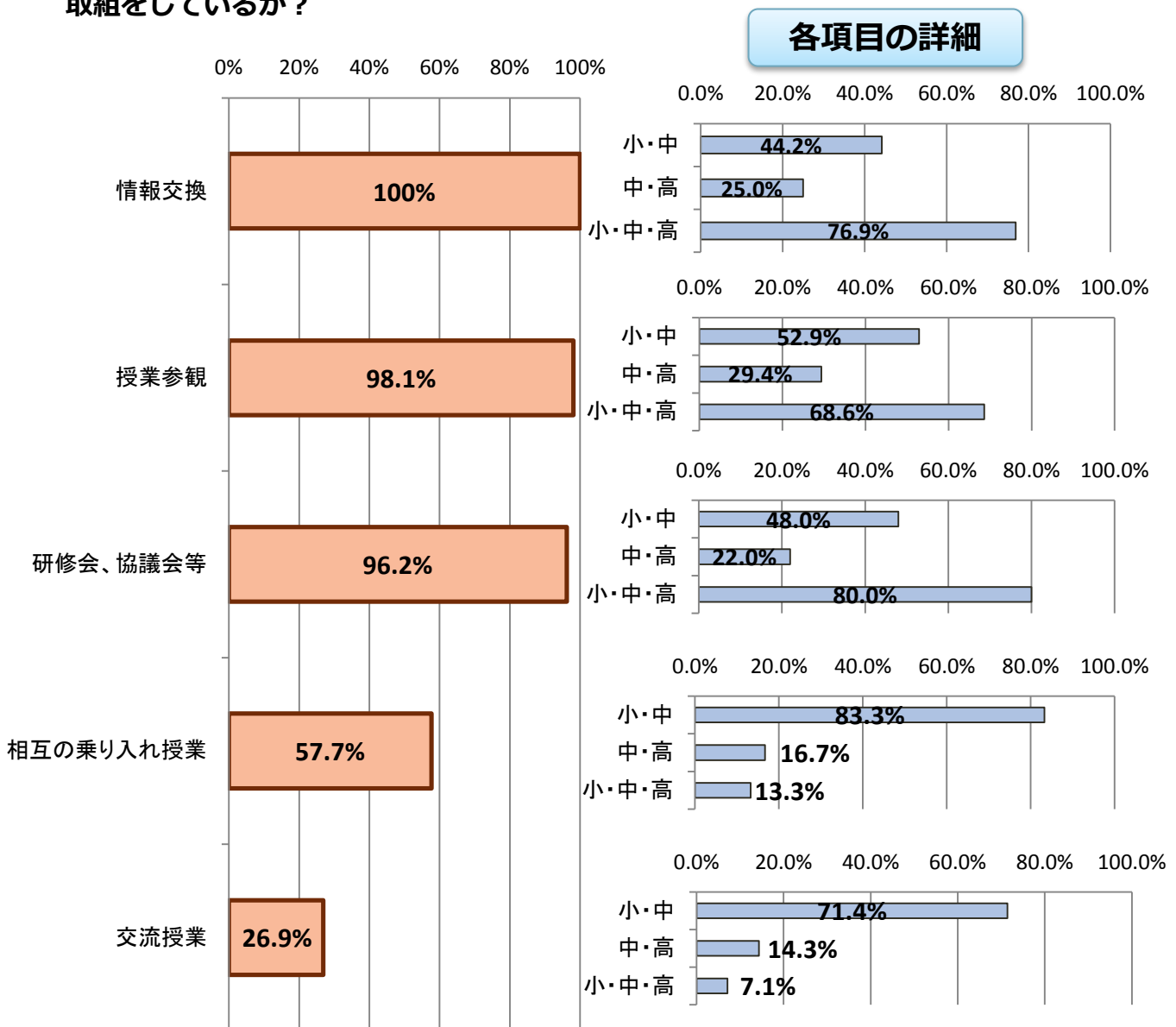
〈その他の内容〉

- ・中学校で開催している校内英語暗唱弁論大会への小学生の参加および大学の留学生との交流活動の実施、小・中・高等学校の児童・生徒が集まって、交流会を実施する予定である。
- ・授業参観で終わることなく、授業における指導実践や子どもの実際のコミュニケーションの姿を基にして、小・中学校互いの指導のよさや課題を明らかにするための研修会を行っている。
- ・今年度は小・中学校一貫のカリキュラム作成、学習到達目標や指導計画の作成を計画している。取り組みを1年分まとめていき、最終的には統一されたカリキュラムにする予定である。

小学校・中学校・高等学校の連携に関する取組

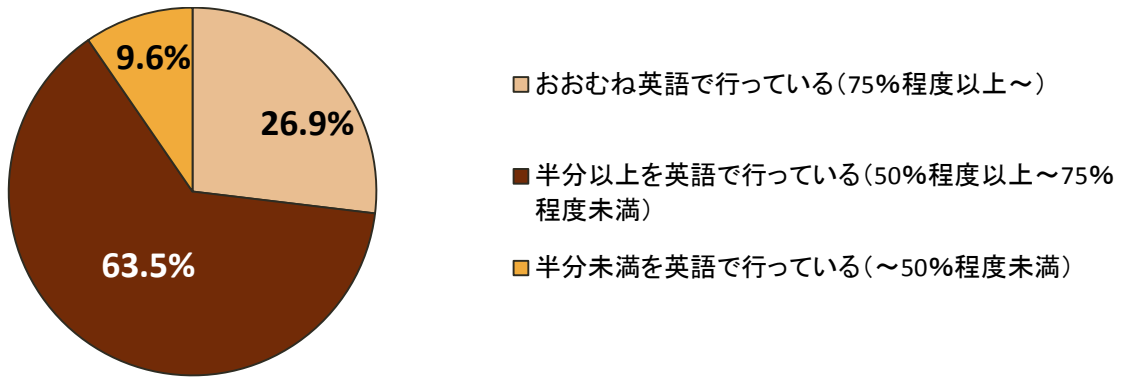
1. すべての中学校で校種間の連携に関する取組が行われている
2. 1のうち情報交換（100%）、授業参観（96.2%）、研修会・協議会等（96.2%）による校種間の連携は多くの中学校で行われている
3. 1のうち57.7%の中学校が相互の乗り入れ授業を行い、交流授業の取組については26.9%の中学校にとどまっている

Q.小学校・中学校・高等学校の連携に関する取組をしている場合、具体的にどのような取組をしているか？

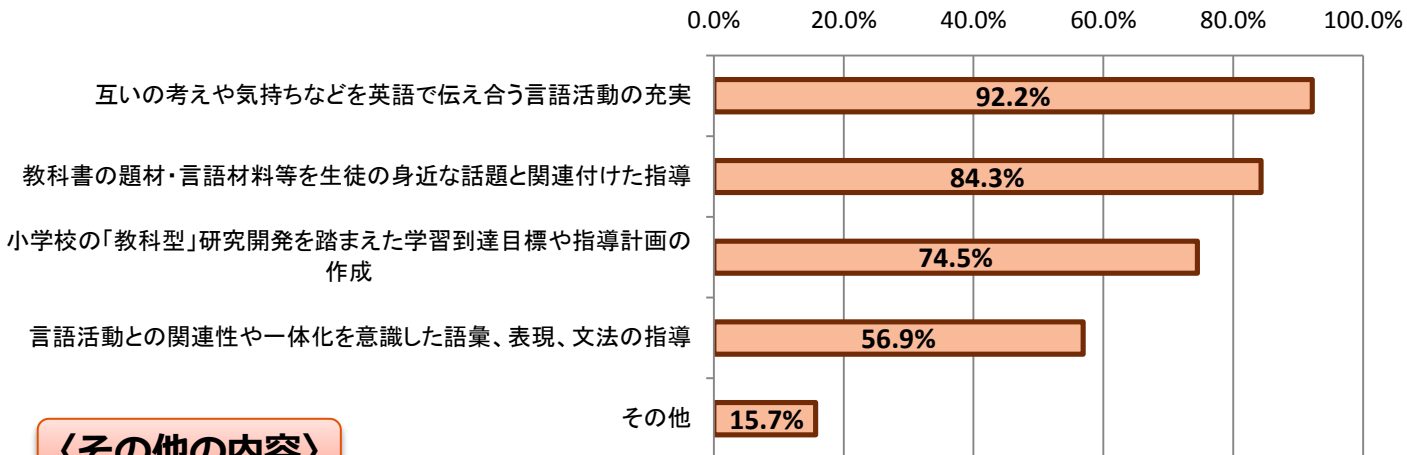


1. 26.9%の中学校が英語の授業をおおむね（75%程度以上）英語で行っており、63.5%の中学校が英語の授業の半分以上を英語で行っている
 （参考：平成26年度英語教育実施状況調査では「おおむね英語で行っている」と「半分以上英語で行っている」の合計が48.9%）
2. 98.1%の中学校が小学校における外国語の教科化を踏まえた取組を検討している
3. そのうち、92.2%の中学校が「考えを英語で伝え合う英語活動の充実」、84.3%の中学校が「教科書の題材・言語材料を生徒の身近な話題と関連付けた指導」を検討している

Q.授業における教員の発話はどの程度英語で行っているか？



Q.小学校外国語の教科化を踏まえた取組を検討している場合、どのような内容を盛り込んでいるか？



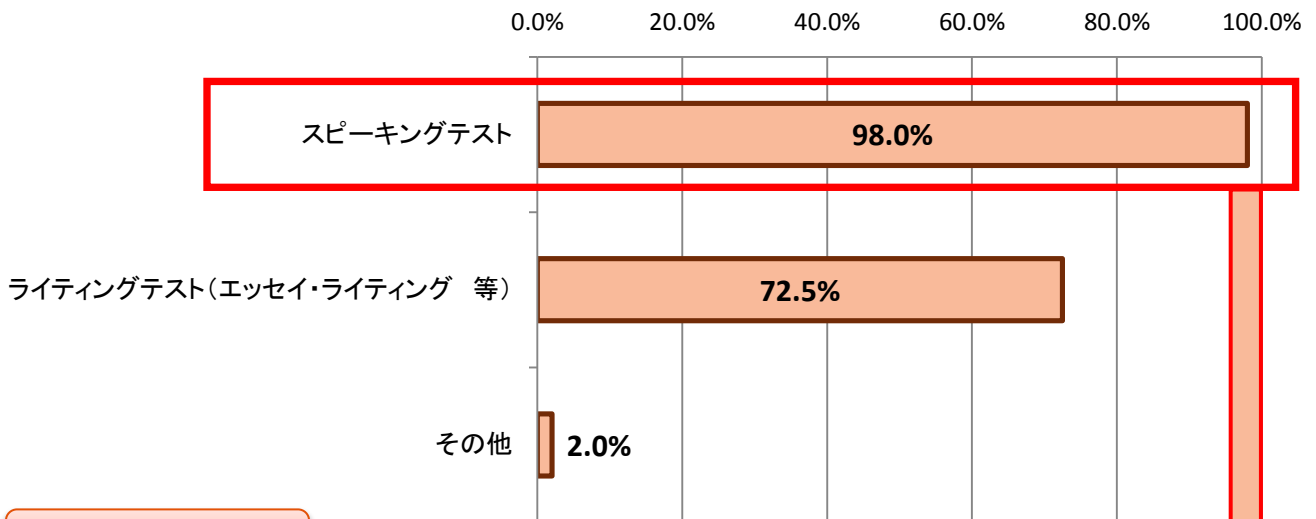
〈その他の内容〉

- ・中学校教員の小学校の授業への参加(参観、ゲストティーチャー)、中学校の授業への小学校教員の参加(参観、ゲストティーチャー)を行っている。それにより、児童生徒の実際の様子や、各学校の成果や課題を把握し、指導法や教材の改善に役立っている。
- ・小学校の学習内容から中学校の学習内容へと円滑に移行することが出来るよう、CAN-DO形式による学習到達目標を連携させることで学びの連続性を図っている。また、中1ギャップ解消の手立てとして「クラスルームイングリッシュ」の共通化を図っている。
- ・音声指導の重視、音とつづりに関する指導の強化。
- ・繰り返し学習、自己表現・現在小中一貫教育研究で取り組んでいる内容との関係付けを図り、次年度以降本格的な研究実践に取り組んでいく予定である。
- ・Hi, friends!1, 2の学習内容や使用場面の活用、デジタル教科書の活用。等

学習評価方法の工夫・改善のための取組

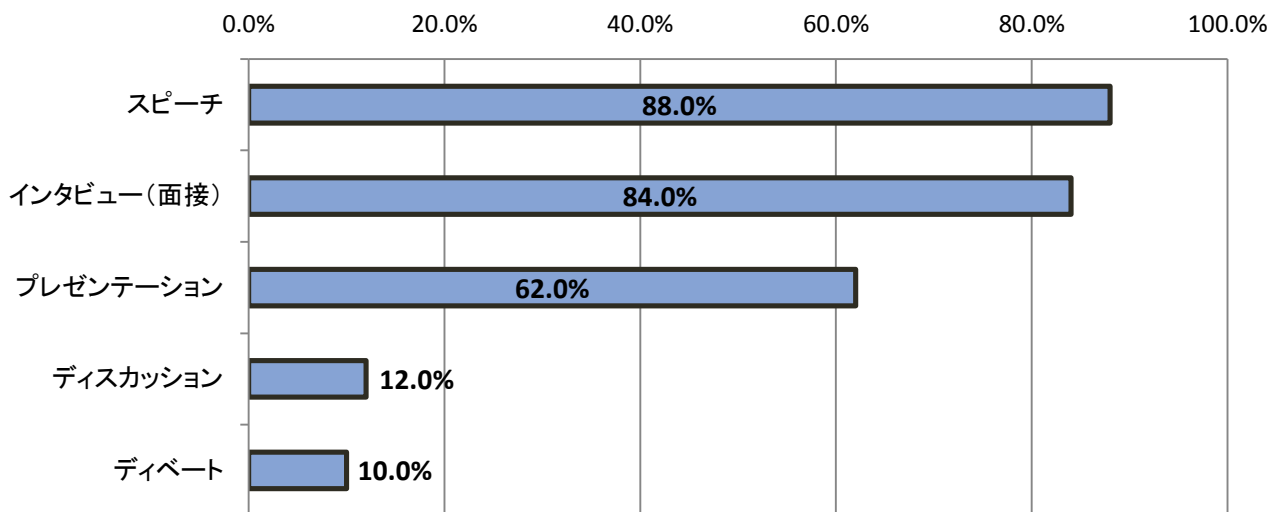
1. すべての中学校が学習評価方法の工夫・改善を行っており、98.1%の中学校がパフォーマンス評価を実施している（参考：小学校は58.9%）
2. パフォーマンス評価を実施している中学校のうち、98.0%の中学校がスピーキングテストを実施し、72.5%の中学校がライティングテストを実施している

Q. 「パフォーマンス評価の実施」と回答した場合、具体的にどのような評価を行っているか？



〈その他の内容〉

・レシテーション。



平成26・27年度英語教育強化地域拠点事業 福井県勝山市の取組事例

目的

小中高一貫した学習到達目標に基づいた授業実践による、英語による豊かなコミュニケーション能力の育成。
評価の在り方を実践・研究し、児童・生徒の英語力の把握と指導方法を改善。

研究の内容

○小中高一貫した学習到達目標の作成

【小学校】

- ・「聞く」「話す」を中心とした音声指導に重点を置き、**自分のことや他人のことを表現しあう力を養う。**
- ・3・4年生は、発達段階を考慮した外国語活動の指導と評価の在り方、
- ・5・6年生は、「読む」「書く」の指導や評価方法を実践・研究。

【中学校・高等学校】

- ・4技能を通じて、「英語を使って何ができるようになるか」という観点から作成した**学習到達目標を活用し、指導と評価を一体的に実施。**
- ・「福-English」など独自教材を活用し、勝山市の自然や恐竜、歴史や生活、文化等、**身近な話題について英語で発信できる力を育成。**

取組内容

○「小中高連絡協議会」、「中高英語担当教員連絡会」「小・中・高合同の授業公開・授業研究会」を実施し、**小・中・高等学校で連携して取り組む体制を整備。**

○小学校学級担任の指導力の向上をねらいとした、**専科指導教員（国による英語加配教員と勝山市直接雇用の英語講師）とのチーム・ティーチングによる授業実践。**

○**福井県独自の英語補助教材（福井県版グローバルスタディーズ、福- English、Let's Read等）を活用した英語教育。**

取組内容の詳細

福井県英語学習CAN-DOリスト

一覧表	その1	その2	その3	その4
Phonics	Phonicsの学習を通して、音のつながりやリズムを感知し、発音の仕方を理解する。	Phonicsの学習を通して、音のつながりやリズムを感知し、発音の仕方を理解する。	Phonicsの学習を通して、音のつながりやリズムを感知し、発音の仕方を理解する。	Phonicsの学習を通して、音のつながりやリズムを感知し、発音の仕方を理解する。
AI.1	Phonicsの学習を通して、音のつながりやリズムを感知し、発音の仕方を理解する。	Phonicsの学習を通して、音のつながりやリズムを感知し、発音の仕方を理解する。	Phonicsの学習を通して、音のつながりやリズムを感知し、発音の仕方を理解する。	Phonicsの学習を通して、音のつながりやリズムを感知し、発音の仕方を理解する。

←福井県英語学習到達目標

勝山市の学校、外国語活動・英語科 学習到達目標

福井県立勝山立峰山小中学校 英語科 学習到達目標

福井県立勝山立峰山小中学校 英語科 英語科 学習到達目標

↓福- English ↑勝山市の小中高一貫した学習到達目標



↑小・中・高合同の授業研究協議会

←「福- English」などの教材を活用し、生徒が初対面の外国人に町の魅力を紹介する場面を想定して中学生が作成した作品

平成26・27年度英語教育強化地域拠点事業 福井県勝山市(中学校)の取組事例

小・中・高合同の授業公開・研究会

取組の内容

- 対象:県内の小・中・高等学校の外国語(英語)教育担当教員等
- 実施回数:年2回
- 実施内容(ここでは中学校を例に挙げる):
 - ・**事前研究会**...公開授業担当教員(研究指定校)の授業を外国語教育担当指導主事や大学教授が事前に参観し、必要な指導・助言を行う
 - ・**公開授業**.....地域拠点だけでなく、地域、校種を超えて広く県内の外国語教育担当教員等を対象に、教員、生徒の半分以上の発話が英語で行われる授業を公開
 - ・**授業研究協議会**...公開授業の内容等について、小中高の教員が忌憚のない意見を述べ合い、校種間で課題を共有し、外国語教育担当指導主事及び大学教授が指導・助言

成果・効果

- ・英語教育強化地域拠点における**先進的な取組を域外の学校へ波及**
- ・異校種の教員が参観、意見交換することで**校種ごとの教育課題を共有し、校種間の接続が円滑になる**
- ・外国語教育担当指導主事が毎回指導・助言に入ることで、年間を見通した課題把握が可能となり、**スパイラル的に改善が図られている**
- ・言語活動を通して**生徒は学習に対する意欲や英語による表現力が高まり、教員は授業運営に対する自信が高まっている**

課題

- ・言語活動(インタラクション等)だけで完結させず、**次の授業をどう設計すべきか**ということ
- ・単元のまとめ部分だけでなく、**教科書本文の内容をどう言語活動と関連付けるべきか**ということ

これまでの課題

- ・教師主導の講義型授業
- ・言語活動を重視したコミュニケーション型授業に対する教員の不安(ノウハウの不足、ファシリテーション能力の不足等)



- ALTと英語教員の英語でのインタラクションで、言語活動のモデルを提示
- ALT・英語教員と生徒の英語でのインタラクションで、意味と形式を指導
- 生徒と生徒の英語でのインタラクションで、生徒の言語活動の機会を保障
- 活動の振り返り【フィードバック】

- ⇒ 3つのインタラクションとフィードバックを意識した授業づくり
- ⇒ 単元や1時間の授業内で、**流暢さや正確さにおいて、生徒の変容がある授業づくり**

○授業における教員の英語使用・生徒の言語活動の状況 (H26年度)

※教員...発話の半分以上を英語で行う ※生徒...授業の半分以上で言語活動を行う

	中学校教員	中学校生徒
研究指定校	100%	100%
全国調査	48.9%	51.6%

全国平均を大幅に上回る

(平成26年度英語教育実施状況調査)

○英語学習を肯定的にとらえる中学生の割合 (H26年度)

	英語が好きだ どちらかと言えば好きだ	英語がわかる どちらかと言えばわかる
研究指定校	77.0%	77.5%
全国調査	48.9%	52.9%

(福井県:研究指定校における生徒アンケート結果、全国:平成26年度外国語活動実施状況調査)

言語能力を効果的に高めるための外国語教育と国語教育の連携に関する取組事例

京都光華中学校

取組の内容

>ねらい:「聞くこと」「話すこと」「書くこと」について国語科での取組を知り、連携していくことで英語科におけるコミュニケーション能力の向上を図る。

>実施内容:

- ①国語の授業で指導している「文章の書き方・話し方」等の単元を踏まえ、英語の授業におけるスピーチやプレゼンテーションの原稿作成や発表に役立てる。

【例】国語科「図表を使って伝えよう『私』の説明文」(中1)の単元で学んだことを、環境問題に関する問題提起を図表を用いて英語で説明する英語科の授業で生かす(中3)。

■中学校学習指導要領「国語」【第1学年】2内容

- A 話すこと・聞くこと(1)日常生活の中から話題を決め、話したり話し合ったりするための材料を人との交流を通して集め整理すること。
- B 書くこと(2)イ図表などを用いた説明や記録の文章を書くこと。

- ②国語の教科書や授業で紹介された学習材(「紹介スピーチ」「グループディスカッション」「プレゼンテーション」等)を参考に、英語の発信型言語活動の教材を作る。

成果・効果

- ・国語科での取組を参考に英語科においても発信型の言語活動につながる指導方法や教材を作成することで、生徒のコミュニケーションへの関心・意欲や表現力の向上が見られる。特に英語に苦手意識があった生徒にとっては国語で学んだことを生かして英語で表現活動ができたということが大きな自信となっている。
- ・国語科で指導していること(新聞記事を題材にしたスピーチ等)が、英語科での発信型言語活動に取り組むことの参考になっている。
- ・国語科の学習を踏まえた英語科での言語活動を通して、「言葉の持つ役割」、「伝え合うことの大切さ」等文字や文構造の違いを超えた言語そのものの価値について感じとれる生徒も見られるようになった。

課題

- ・生徒が英語で発表する場合に自分の考えや意見を聞き手にわかりやすく伝えたり、聞き手にとって聞きたい内容になっているか、話す内容や考えをまとめたりするには、国語の授業でも同様の経験を積んでおくことが必要である。
- ・生徒が論理的にまとめた内容等を話したり、書いたりするためには、指導する英語科教員にも論理的思考力や文章力がより必要になってくる。
- ・今後、国語科との連携をさらに深めていくためにどのようなことができるか研究を深めていく必要がある。

平成27年度 中学校「学習指導要領計画表」【英語】【3年】
 関:コミュニケーションへの関心・意欲・態度・外国語表現の能力 関:外国語理解の能力 関:言語や文化についての知識・理解

月	単元	学習内容	教科書	評価規準(B) 対話的表現	判断規準(評価基準) 発話の意や意	判断規準(評価基準) 発話の意や意	〇への手立て	評価方法	国語教科書との関連
9	自分の意見を表明しよう	①理解問題について自分の意見を書いたり言ったりして述べたし、②意見交換をする。③授業料金の一部を返すための必要書類の英文を添削する。	Unit 4.5 Listening Plus 4.6 Speaking Plus 2	テーマについて、賛成・反対とその理由を相手に伝えることができる。また、相手からの理由に答えることができる。	テーマについて、賛成・反対とその理由を論理的に述べることができる。	テーマについて、賛成・反対とその理由を論理的に述べることができる。	紙書やプリント等を参考に準備し、原稿をなるべく見ずに伝えようとする。 参考となる英文や文章をもとに書きよに話す。また、意見や理由を述べた意見を参考にできるようにする。	①定期考査 ○音読テスト ②授業時の活動 ○インテグレーション ③自己発表 ○課題 ④スピーチイベント	中1「図表を使って伝えよう」
10	あるテーマについて読まれる英文を書き、内容を理解することができる。	あるテーマについて書かれた英文を読み、内容を理解することができる。	不定詞 分詞の連言修飾 関係疑問文	あるテーマについて読まれる英文を書き、内容を理解することができる。	あるテーマについて書かれた英文を読み、内容を理解することができる。	あるテーマについて読まれる英文を書き、内容を理解することができる。	中1の型や型を参考に準備し、原稿をなるべく見ずに伝えようとする。 参考となる英文や文章をもとに書きよに話す。また、意見を参考にできるようにする。	①定期考査 ○インテグレーション ②自己発表 ○スピーチイベント	

↑国語との関連を記した指導計画表



↑ポスター形式の英語発表



↑発信型言語活動教材の一例

平成27年度 外部専門機関と連携した英語指導力向上事業における取組状況（高等学校）

1. 調査の目的

- 都道府県・指定都市教育委員会における外部専門機関と連携した英語指導力向上事業の研究の取組状況を把握し、現時点の成果・効果や課題を分析した上で研修協力校等関係者が情報を共有し、今後の研究の充実に資する。
- 具体的な取組の状況について調査し、次期学習指導要領の改訂に向けた中央教育審議会における議論の参考とし、今後の施策の検討に資する。

2. 調査の対象・期間

※本事業は平成26年度より4年間実施予定

- 調査対象
外部専門機関と連携した英語指導力向上事業 研究指定校 88校／88校
- 調査期間
平成27年10月15日～平成27年10月27日
- 主な調査項目
 - ①学習到達目標（CAN-DO形式）の設定及びそれに基づいた指導と評価に関すること
 - ②英語による授業及び発表、討論・議論、交渉等の言語活動の高度化に向けた取組に関すること
 - ③新たな指導等を行うための教員研修の充実にに向けた取組に関すること 等

3. 主な取組状況

- (1) 学習到達目標（CAN-DO形式）の設定及びそれに基づいた指導と評価に関すること
 - 学習到達目標の設定及び指導について
ほとんどの学校が「CAN-DO形式」の学習到達目標を設定し、設定した学習到達目標に到達するため、指導方法の工夫・改善を行っている。
指導方法の工夫・改善を行っている高等学校のうち、多くの高等学校が「教員間で学習到達目標達成のための指導方法を共有」「年間指導計画・単元計画の作成に活用」と回答している。
 - 評価について
ほとんどの学校が学習評価について、評価方法の工夫・改善を行っている。
評価方法の工夫・改善を行っている高等学校のうち、ほとんどの高等学校が「パフォーマンス評価の実施」と回答している。
- (2) 英語による授業及び言語活動の高度化に向けた取組
ほとんどの高等学校が英語の授業の半分以上を英語で行っている。
また、ほとんどの高等学校が英語による発表、討論・議論、交渉等の言語活動の高度化に向けた取組を実施。「プレゼンテーション」「スピーチ」「ディスカッション」「ディベート」等が主な内容。
- (3) 新たな指導等を行うための教員研修の充実にに向けた取組
多くの高等学校で新たな指導等を行うための教員研修を充実させている。
「有識者等による指導・助言を中心とした研修会」「外部専門機関と連携した研修会等の実施」「各校種合同の研修会」等が主な内容。

4. 主な調査結果分析

(1) 学習到達目標 (CAN-DO形式) の設定及びそれに基づいた指導の取組に関すること

- **93.2%の高等学校が「CAN-DO」形式の学習到達目標を設定。**
うち、98.9%の高等学校が設定した学習到達目標に到達するため、指導方法の工夫・改善を行っている。
- 指導方法の工夫・改善を行っていると回答した高等学校のうち、79.3%の高等学校が「教員間で学習到達目標達成のための指導方法を共有」し、78.2%の高等学校が「年間指導計画・単元計画の作成に活用」し、63.2%の高等学校が「学習到達目標を生徒と共有」している。

〈成果・効果〉と〈課題〉 (自由記述抜粋)

〈成果・効果〉

- 各単元・各授業における**学習到達目標を明確に捉え、生徒が身につけるべき知識・能力及び態度を育てるために何が必要かをその都度確認**している。「CAN-DOリスト」からのバックワードデザインで目標を提示する意識が強くなった。
- 学習到達目標を「CAN-DOリスト」の形で作成する際に、**3年間でどのような英語力をつけて欲しいかという教員間での情報交流**を行うことができた。それによりこれまでの取組を振り返り、どのような指導が効果的であるかという話し合いを行うことができた。
- 学習到達目標の達成に向けて今まで以上に**各技能を意識した授業を計画し、実施する**ようになった。また評価項目を入れることにより、**生徒の実態を複数の教員が把握する**ようになり、**自身の授業改善につながった。**
- **学習到達目標を生徒・保護者・教員で共有し、それぞれの意識が高まった。**

〈課題〉

- 学習到達目標は固定化されたものではなく、**年度ごとの生徒の実態に応じた改訂が課題**である。また、その際には、**教員だけのものとするのではなく、生徒との共有も検討すべき**である。そのことによる、**生徒の学習への動機付けの育成、及び生徒自らによる学習過程や習熟度の客観的な振り返りが喫緊の課題**である。
- **生徒自身が日頃から活用できるような工夫が必要**である。学習到達目標を用いて、月ごと、学期ごとにそれまでの学習を振り返り、生徒が自分の力を把握できる仕組みが構築できれば、学習への動機付けともなり、より効果的な学習成果が期待できる。
- 目標が途中でぶれないよう、**生徒・教員共に、目標の確認と共有を繰り返す必要がある。**

(2) 学習評価方法の工夫・改善の取組に関すること

- **97.7%の高等学校が学習評価について、評価方法の工夫・改善を行っている。**
うち、91.9%の高等学校が「パフォーマンス評価」を実施し、64.0%の高等学校が「授業などにおける活動観察」実施している。
- 「パフォーマンス評価」を実施していると回答した高等学校のうち、**97.5%の高等学校が「スピーキングテスト」を、78.5%の高等学校が「ライティングテスト」を実施している。**

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- **「CAN-DO」形式での学習到達目標を、評価方法とともに各学年の学期毎に設定しており、生徒に対しては、パフォーマンステストに向けて準備を促し、本番できちんとパフォーマンスができるように指導している。その結果、失敗を恐れずに、積極的にコミュニケーションを図り、自分の考えを発信する習慣が着実に形成されてきた。**
- **普段の授業においてパフォーマンス活動を多く取り入れており、その活動をベースにしたパフォーマンステストを評価全体の3分の1以上に充てることができた。筆記試験では測りづらいコミュニケーション力等も評価することが可能となり、生徒の取組は極めて良好であった。**
- **評価規準を生徒と共有しながら、4技能すべての評価をしている。すべての活動について評価されていることを認識しているため、生徒の授業中の活動への取組状況は良好である。また、学習到達目標に沿った自己評価の機会も増えたことで、英語学習への意欲も向上している。**

〈課題〉

- **評価方法がシステム化されていないため、客観的に評価するのが難しいと考える担当者が少なからずいる。評価に関しては、さらなる検証が必要であること、CAN-DOリストとの関連付けが完全にはできていないところが課題である。また、評価方法のシステム化により、評価結果を効果的に授業に活かしていくということも今後の課題である。**
- **教員数に比して生徒数が多いため、特に「話すこと」のパフォーマンステストでは多くの評価機会を設定することが困難である。また、評価規準の共通理解ができにくい。**
- **4技能をバランスよく評価しなければならないという意識は教員間にあるが、観点別学習状況の評価についてはまだ十分には組み入れることが実現できていない。**

（3）英語による授業及び言語活動の高度化に向けた取組

- 90.9%の高等学校が授業の半分以上を英語で行っている。
- 97.7%の高等学校が言語活動の高度化に向けた取組を行っている。
うち、89.5%の高等学校が「プレゼンテーション」、86.0%の高等学校が「スピーチ」、53.5%の高等学校が「ディスカッション」に取り組んでいる。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- 「コミュニケーション英語」・「英語表現」とともに、**学年ごとに共通のワークシートを使い、同じ手順で授業を進めているので、教員間で授業のコンセプトを共有しやすい。**また、**どちらの科目も英語で授業を行うことを基本とし、生徒が英語で意見を述べることを中心とした授業を進めているため、英語でコミュニケーションを取ることにほとんど抵抗を持たない生徒が育ってきている。**
- コミュニケーションを重視した授業づくりのための指導内容・方法を取り入れて以降、生徒の英語に対する意識に大きな変化がみられる。**例えば、スピーチやプレゼンテーションなどのパフォーマンス課題に対して積極的に取り組む生徒や、そのような課題を通じて人前に立つことを怖がらなくなったと話す生徒が増えたと実感している。
- 授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業における英語使用の割合が増加した。**使用する英語は、生徒の理解の程度に応じて、教員が十分に配慮した上で、簡単なクラスルームイングリッシュを効果的に使用している。また、**言語の使用場面を適切に設定し、言語に関する技能の習得を目的とした指導を意識している。**

〈課題〉

- 教室内でクラスメートがいるからこそ成立する活動であるか、互いに伝え合うべき価値のある活動であるかといった視点から、作成済みのタスクでも継続的に見直して改良していく必要がある。**教室以外の場でも自発的に英語に触れたいと生徒が感じるような内容のタスクを作成できれば理想的である。
- 今後行う高度な言語活動（プレゼンテーション・ディベート・ディスカッション等）につなげるために、土台となる**即興力**（相手の話を聞いたあとすぐに相手に質問をしたり、相手の質問にすぐに返答できたりする力）**をいかにして養うかということが課題**である。

（４）新たな指導等を行うための教員研修の充実に向けた取組

- 86.4%の高等学校が新たな指導等を行うため、教員研修を充実させている。

うち、76.0%の高等学校が「有識者等による指導・助言を中心とした研修会の実施」、57.3%の高等学校が「外部専門機関と連携した研修会等の実施」、49.3%の高等学校が「小・中・高等学校や中・高等学校合同の研修会等の実施」に取り組んでいる。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- 中学校・高等学校間の相互授業観察や、協議会・研修会を通じて、互いの指導方法を分かち合うとともに、生徒の発達段階に応じた指導内容を教科で共有できるようにしている。6年間を通じた「CAN-DOリスト」を共有することで、**中学と高校で切れ目のない体系的な指導体制**が整えられている。
- 外部有識者が授業を参観し、研究協議の場で指導助言を行うことによって、日頃の授業の改善すべき点が明確になった。
- 大学等の外部専門機関と連携した研修を計画的に行うことにより、**指導方法、評価方法、学習到達目標の設定などについて、体系的に参加者の理解を深めることができた。**
- 研修協力校における公開授業や昨年までの研修協力校による実践発表等を行うことにより、**授業改善の取組の成果を県内に広く周知することができ、県内の各学校においても授業改善に向けた取組が行われてきている。**（教育委員会回答）

〈課題〉

- 域内の大学に、**高等学校英語教育を専門とする研究者がいいため、関西圏や遠方から講師を招くことになり、継続したスモール・ステップの研修を組み立てることが難しい。**
- 面積が広く、また1校あたりの教員が少ない本県において、**集合型の研修や公開授業に参加することができる教員が限られており、効果は限定的である。**次年度以降は、各学校や地域を訪問しての指導や出前講座等をより充実させる方向で検討している。（教育委員会回答）

(5) 高等学校 英語教育の全体に関する記述〈抜粋〉

〈成果・効果〉

- 統一された指導目標に基づいた共通のワークシートやプレゼンテーションソフトを用いることで、**指導者による指導内容の差が解消されつつある**。1つの教材について、複数の目で精査し、議論を重ねることにより、自作教材の質の向上にもつながっている。生徒の学習到達度が高い教材、教育効果の高い教材について、**教員間で情報を共有することが、効果的な教材を新たに作成することに役立っている**。
- ICT機器を取り入れることで、**英語が苦手な生徒も興味・関心をもって授業に取り組むことができた**。また、教科書以外の情報を提示することができ、内容理解にとどまらず、理解した内容を踏まえながら発展的に考えさせることもしやすくなった。
- 1年次よりauthenticな英語に触れさせることを意識し、英字新聞等を活用して4技能の育成を目指してきた。このことにより、**時事問題等に触れることで背景知識の活性化や、その話題に関する自己表現活動にもつなげることができた**。
- 同一科目を担当する教員同士は毎回の指導内容及び指導法について常に打ち合せを持ち、それらの内容について**学年の中で共通した指導が行われている**。また他学年の科目についても英語科の研修の場で情報を共有するなどして、**効果的な指導について学校全体の取組として共有できる指導体制を築くことができています**。
- プレゼンテーションなどの自己表現活動では、**普通の授業では気づけなかった生徒の優れた才能や長所を見つけることができた**。

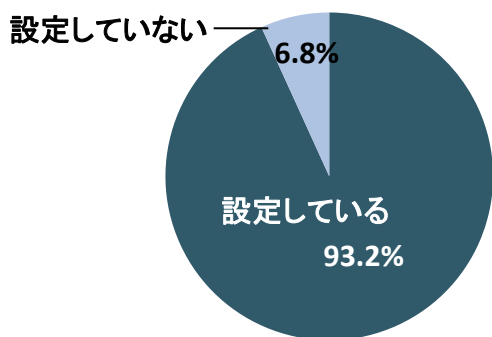
〈課題〉

- 中学校段階の学習内容の定着が図られていない生徒も見られる。学び直しについても1年生初期の段階では積極的に指導内容に盛り込んでいく必要がある。同時に、習熟度が高い生徒に対しては、より多くの自己表現の機会を与え、学習意欲を更に高めていくための工夫を図る必要がある。
- 生徒が3年生になり進学指導を意識したときに、**新しい指導方法でも生徒の進路実現ができるという自信が教員の中にないため、3学年になると教員主導の一斉指導に戻っていることが多い**。
- 生徒の「英語運用能力」を大幅に改善するためにも、**クラスサイズの小規模化実現が求められる**。

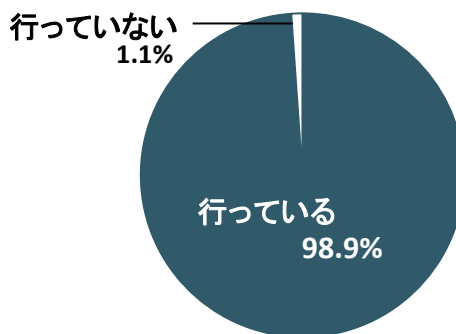
学習到達目標（CAN-DO形式）の設定及びそれに基づいた指導の取組

1. 93.2%の高等学校が「CAN-DO」形式の学習到達目標を設定している
2. 上記1のうち、98.9%の高等学校が設定した学習到達目標に到達するため、指導方法の工夫・改善を行っている

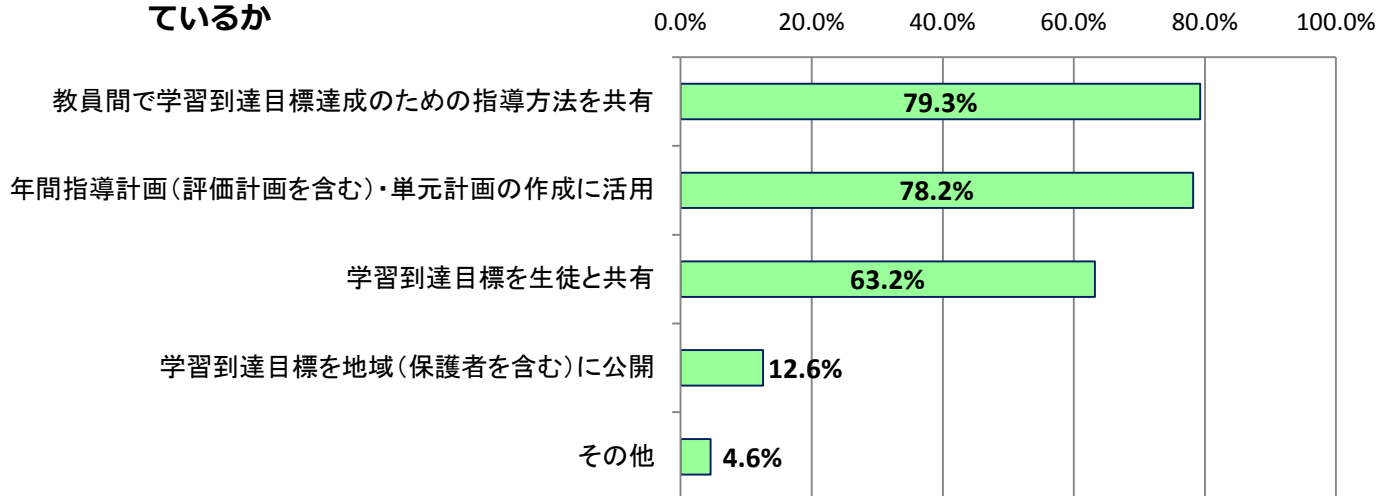
1. 「CAN-DO」形式の学習到達目標を設定しているか



2-1. 設定した学習到達目標に到達するため、指導方法の工夫・改善を行っているか



2-2. 「行っている」にチェックした場合、設定した学習到達目標を具体的にどのように活用しているか



〈その他の内容〉

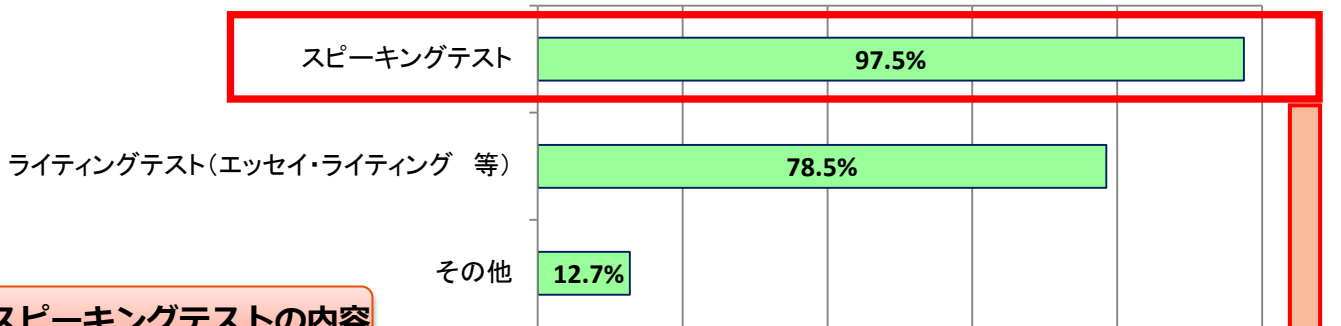
- ・生徒が学習到達目標を意識して授業に臨めるように、学期毎に自己評価を行っている。
- ・外部試験受験後の分析会の際、本校のCAN-DOリストに沿って、達成点、課題点等をあげ、指導に結びつけている。
- ・設定した学習到達目標を達成するための教材選定、教材の扱い方の工夫
- ・1年次では実用英語技能検定3級取得を目指している。

学習評価方法の工夫・改善の取組

1. 97.7%の高等学校が学習評価について、評価方法の工夫・改善を行っている
2. 上記1のうち、91.9%の高等学校が「パフォーマンス評価」（スピーチ、プレゼンテーション、インタビューなど）を実施している

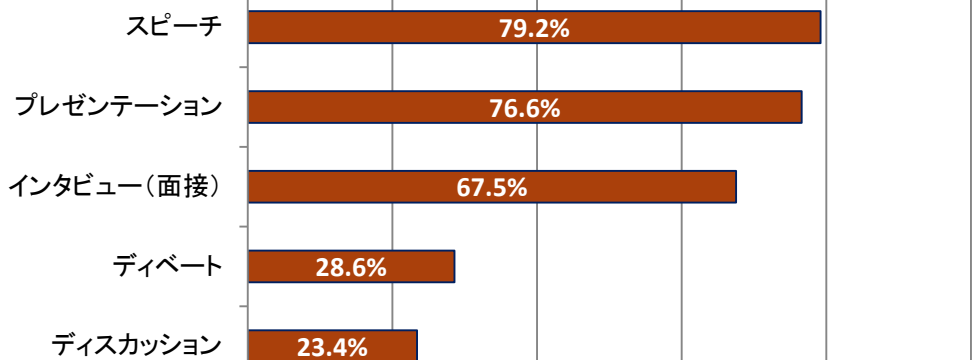
Q. 「パフォーマンスの評価の実施」と回答した場合、具体的にどのような評価を行っているか

0.0% 20.0% 40.0% 60.0% 80.0% 100.0%



スピーキングテストの内容

0.0% 20.0% 40.0% 60.0% 80.0% 100.0%



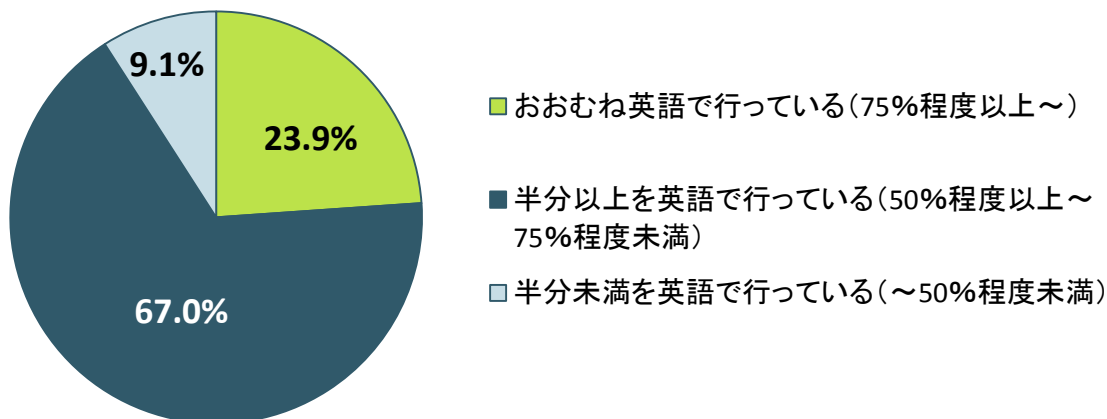
〈その他の内容〉

- ・ロール・プレイ(教科書の登場人物をスタジオに招いてインタビューするという設定)。
- ・パフォーマンステストに加えて、定期試験において、ライティング形式の問題や英語の運用力を見る問題の割合を従来より増やすようにしている。
- ・Drama Projectの発表。
- ・生徒同士でのピア評価、グループ同士での評価(タブレット端末の録画機能を用いて互いを評価するなど)。
- ・校内実力テストや定期考査において、ある人物の状況とある日の行動を提示し、その人物になって日記を書く。
- ・夏休みに体験した出来事を表す写真やチケットを元に、英語でスピーチやプレゼンテーションを行う。
- ・会話の音読テスト。
- ・リテリング。

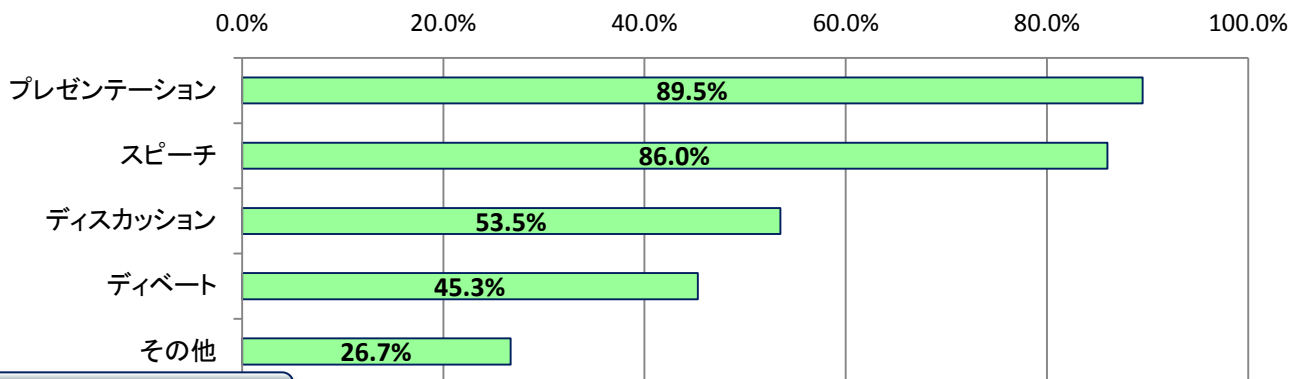
英語による授業及び言語活動の高度化に向けた取組

1. 23.9%の高等学校が英語の授業をおおむね（75%程度以上）英語で行っており、67.0%の高等学校が英語の授業の半分以上を英語で行っている（合計90.9%）（参考：平成26年度英語教育実施状況調査では「おおむね英語で行っている」と「半分以上英語で行っている」の合計が49.1%）
2. 97.7%の高等学校が言語活動の高度化に向けた取組を行っている
3. 上記2のうち、89.5%の高等学校が「プレゼンテーション」、86.0%の高等学校が「スピーチ」、53.5%の高等学校が「ディスカッション」に取り組んでいる

Q.授業における教員の発話はどの程度英語で行っているか？



Q.言語活動の高度化に向けた取組をしている場合、どのような取組を行っているか？



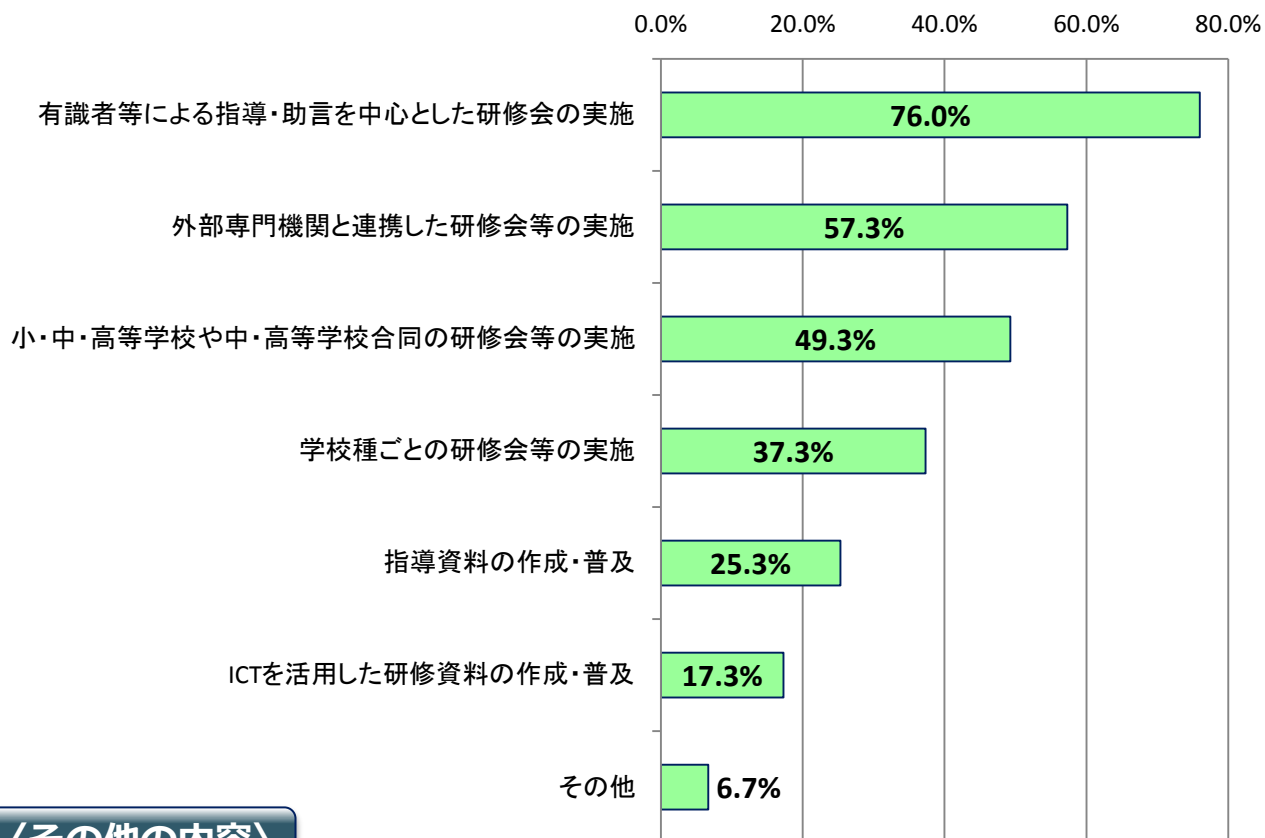
〈その他の内容〉

- ・ロール・プレイ(教科書の登場人物をスタジオに招くという設定で、インタビューを行う形式)
- ・チャット形式を取り入れ、原稿作成等の準備をせずに英語を話す取組を行っている。
- ・英会話: 想像上の「部活動」を生徒が考えて「入部勧誘ポスター」を書き、その部活動についての説明や勧誘をグループ・プレゼンテーションの形で実施した。
- ・英語スキット・英語劇、英語論文の作成、ペア・ワークによるディスカッション。
- ・既習内容を口頭で要約し、相手に伝える活動。
- ・インタビュー形式、写真やイラストの描写、エッセイ・ライティング。
- ・「英語表現」において「英語落語」を取り入れ、英語による表現力の育成に取り組むとともに、発表会を実施することにより、具体的な発表の場を生徒に提供している。
- ・模擬国連への参加。

新たな指導等を行うための教員研修の充実に向けた取組

1. 86.4%の高等学校が新たな指導等を行うための教員研修を充実させている
2. 上記1のうち、76.0%の高等学校が「有識者等による指導・助言を中心とした研修会の実施」、57.3%の高等学校が「外部専門機関と連携した研修会等の実施」、49.3%の高等学校が「小・中・高等学校や中・高等学校合同の研修会等の実施」に取り組んでいる

Q. 「教員研修を充実させている」と回答した場合、具体的にどのように充実を図っているか？



〈その他の内容〉

- ・授業公開週間を年2回設け、教科内でその授業について話し合う。
- ・外部試験の結果を踏まえた分析会を実施し、本校のCAN-DOリストの項目に照らし合わせて達成点や課題点を把握し、指導に活かすようにしている。
- ・日々の授業のワークシートを共有しているが、CAN-DOリストのどの項目を達成させるためのタスクなのかを示している。取り扱った項目については、生徒に配布したCAN-DOリストにチェックさせ、生徒が自分の達成状況等を把握できるようにしている。同時に、CAN-DOリストの各項目に対する生徒の反応や教材との整合性により、タスクを見直すことにつなげるようにしている。
- ・外部団体主催の語学研修会への参加。
- ・英語多読に関する研修。
- ・日本英語検定協会と連携した高等学校教員向け英語研修の実施。

平成26・27年度外部専門機関と連携した英語指導力向上事業 宮城県石巻高校の取組事例

目的

公開授業や外部専門機関と連携した研修会を通して、英語科教員の指導力向上に資する

② 取組内容

「英語表現Ⅱ」における表現活動の研究 “Speaking→Writing”の指導プロセス

- Speakingを中心とした表現活動①
 - * 与えられたテーマについて、即興で話しながら互いに意見交換。
- Speakingを中心とした表現活動②
 - * その場で指名された生徒がプレゼンテーションを行う。
 - * 原稿がないため、生徒は必然的に顔を上げてプレゼンをする。(即興的な発信力の育成)
- Writingを中心とした表現活動
 - * Speakingで発表した内容を、教科書でターゲットとなっている表現や文法事項等も考慮しながら丁寧に書く。

⇒1～3を授業の柱とし、県内の中・高の教員に授業公開⇒研究協議

公開授業参加者のアンケート結果

- ・生徒の「表現したい」という気持ちをよく引き出していた。
- ・間違いを恐れずに対話を楽しんでいる生徒の姿に感銘を受けた。
- ・生徒が英語を使う機会として授業が設定されていた。Writingに生かせるSpeakingが大変参考になった。



↑Speakingを中心とした表現活動↓



↑Can-Doリスト

↑米国の高校生との文通活動



① 年度当初の授業

= パラグラフ構造の習得を重視したWritingによる表現活動をテーマにした授業

成果

構成を意識し、まとまった量の文章で自分の意見を表現できるようになった “Writing→Speaking”の指導プロセス

課題

正確性に拘る生徒が増え、即興的にアウトプットする力の育成に繋がらない

原稿作成等のWritingによる準備活動を排除し、Speakingによる即興的な表現活動を実践

③ 成果

生徒の成果

- 即興的なパフォーマンスで授業を構成するため、**学習した表現や文法事項を自身の表現の中で実際に使いながら学習することができる。**
- パフォーマンス中心の授業を行うことで、その場で出てきた課題を教室全体で共有し、その場で解決に導くことができる。
- Speaking活動を通じて発信する内容の要点がまとまった後にWriting活動に取り組むため、より**短時間で自身の意見を書くことができる。**
- 英語学習に対する**意欲が高まり、英語での発話ややりとり抵抗を示す生徒がいなくなった。**
- SNSを活用して行う米国の高校生との文通活動へ抵抗なくスムーズに移行できる。

教員の成果

- ◎授業の**雰囲気良くなる**とともに、教員と生徒の**信頼関係が強固になり、授業の進行が円滑になった。**
- ◎生徒が活動できるようにするための**ファシリテーターとしての意識が高まっている。**
- ◎相互に授業参観・情報交換する**授業研究が活発になり、教員集団が一枚岩となってCAN-DOリストに基づいた教育活動に取り組んでいる。**

④ 課題

- ・個々の教員の個性を活かしつつ、「石巻高校英語科」として**教員全員が共通して実践できる指導方法を複数確立する必要がある。**
- ・他校や中学校との**連携・交流をさらに広げ、深めていく必要がある。**

平成26・27年度外部専門機関と連携した英語指導力向上事業 静岡県立沼津西高校の取組事例

目的

生徒と「知的に学ぶ」言語活動を中心とした授業を通じ、4技能をバランスよく伸ばす

これまでの課題 ①

生徒

- ・用意した原稿に基づいて指定の時間で決められた内容を話すことはできるが、即時的・即興的に話すことができない。
- ・原稿がないと短い発話で終わってしまい、論理的に話せないため、自分の考えを表現することに消極的になってしまう。

取組内容 ②

1. 帯活動 (Mission in Talking)

- ・授業冒頭の3～4分でウォームアップのスピーキング活動を行う
- ・スピーキング活動の内容は既習の語彙を相手に推測させるクイズや、与えられた話題についてメリット・デメリットを述べ合う簡単なディベートなど

2. 授業で使用するワークシートの工夫

- ・視覚的に内容の理解を促す「グラフィック・オーガナイザー」の理論を取り入れたワークシートを作成・活用し、教材内容の概要理解や要点整理を行うとともに、論理的な思考力・表現力を養う

3. ゴール・アクティビティ

- ・授業で扱うテーマについて、「自分だったらどうするか」等の観点で教材をパーソナライズする言語活動をゴール・アクティビティとして設定する

4. パフォーマンステストを取り入れた観点別学習状況の評価

- ・全生徒を対象に定期考査の日程の中でスピーキングテストを行う
- ・学期ごとに1学年ずつ実施し、校内の英語科教員全員が試験官を務める

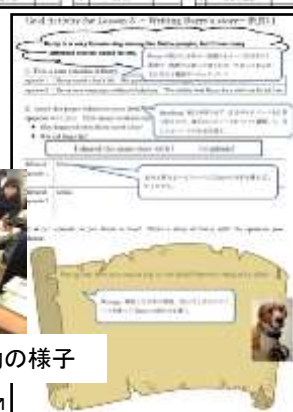
▽帯活動 (Mission in Talking)のワークシート・活動の様子



←「グラフィック・オーガナイザー」の ↓理論を取り入れたワークシート



↑教室内の言語活動の様子



ゴール・アクティビティのワークシート(教員用)ス

スピーキングテストの問題→

質問:「授業中、発表したり自分の意見を述べたりすることができましたか」
対象:「コミュニケーション英語Ⅱ」受講者73名

	できた	まあできた	あまりできなかった	できなかった
H27 1学期末	30.0%	47.5%	22.5%	0%
H27 2学期末	57.5%	37.5%	5.0%	0%

みなさんの英語科の1学期に基きます。そのことについて、次の議題に就いて議論で結論に到着してください。

- <議題①> 4 Skills of Language の3つの学習のどれかを用いて説明している。
- <議題②> 友達がどうすればいいか、適切なアドバイスを出している。

相互議の話し合いで考える時間 40分
発表する時間 40分

私、小倉いづはよくお父さんがおぶしてくれたんだ。僕ら、船のお父さんでクマめたいに大きいでしょ。好きになるタイプもいつも僕の大いに入り。みんなが活躍するアイドルのことが興味持てないんだよね。貴かな。どう思う？

成果 ③

- ・スピーキング活動が増えたことで、英語で話すことに対する抵抗感が少なくなり、原稿がなくても身近な話題について自分の意見を意欲的に表現できる生徒が増えた。(アンケート結果参照)
- ・パフォーマンスの上手な生徒が他の生徒の良い刺激となっている。
- ・Mission in Talkingによって教室の雰囲気良くなり、授業の質が向上した。
- ・ワークシートの工夫により、短文であっても筋道立てて構成し、自信を持って論理的に表現できる生徒が増えた。

課題 ④

- ・パフォーマンステストの回数を増やしたいが、人的にも時間的にも十分な余裕がない。また、採点基準については、さらに精緻なものにする必要がある。
- ・教員の異動があっても本校の取組を継続できる指導体制をさらに強化する必要がある。

平成26・27年度外部専門機関と連携した英語指導力向上事業 京都市立紫野高校の取組事例

目的

英語で行うことを基本とした、4技能を総合的に育成する授業実践

取組内容 ②

○「言語活動の充実」に焦点を当てた授業実践

各学年各科目でパフォーマンス課題をこまめに設定し、知識や技能の「習得」だけでなく、「実践」する力をつけるための工夫を行う。特に「英語表現」等の授業では、文法や構文を実際の場面で使うことができるよう「コミュニケーション」に学習するための研究を行っている。また、中心となって研究する教員の授業をモデル授業として位置付け、公開授業を行っている。今年度末に、研究報告として授業ビデオ(言語活動ビデオ)を作成し、京都市立高校全体で共有する予定である。

○CAN-DO形式での学習到達目標の設定による指導と評価の一体化

平成26年8月にCAN-DOリスト及び各学科、コース毎の3年間の英語学習プランと学年毎の学習到達目標の設定を行った。学習到達目標は、できる限り具体的数値で示せるもので設定し、指導の途中でも到達度合いを検証しやすく工夫している。今年度は学習到達目標をシラバスに組み入れ、活用している。

成績比率(各科目平均)は 定期考査:パフォーマンステストが6:4である

成果 ③

生徒

- 授業内での言語活動や英語インタビュー、パフォーマンステストを数多く経験することで、英語で表現することに積極的になっている。
- スピーチコンテストや国際交流活動、外部検定試験の受験など英語力を活かした自主的活動に取り組む生徒が増加した。

◆英検取得状況 2015(秋まで)	1年 (アカデミア)	2年 (アカデミア)	3年 (直観)
準2級以上	49名 (10%)	74名 (87%)	77名 (93%)
2級以上	6名 (12%)	43名 (51%)	63名 (76%)

教員

- 学習到達目標等に対する教員間の共通意識が醸成されてきた。
- 指導内容の偏りを解消し、4技能のバランスに考慮した観点別学習状況の評価をしようとする意識が強くなった。
- 教員間での情報交流や資料・教材の共有、引き継ぎが進んだことにより、各教員の負担軽減や授業準備の質的向上につながった。

これまでの課題 ①

生徒

- 英語での表現活動に消極的で、抵抗感を抱く生徒が数多くいた。
- 英語の学びを活かした自主的活動に参加するのはごく一部の生徒にとどまっていた。

教員

- 「Reading」「Listening」に特化した授業運営が中心。
- 教員間の情報共有が少なく、英語科として横の連携が図りにくい指導体制。

レベル	金銭的特長	聞くこと		読むこと		書くこと		話すこと		総合的な英語力		英語力向上(%)	英語力向上(%)	英語力向上(%)
		聞くこと	読むこと	書くこと	話すこと	聞くこと	読むこと	書くこと	話すこと					
Grade 5	1年	1年	120~160点	140/200点	30/50点	120~160点	140/200点	30/50点	120~160点	140/200点	30/50点	120~160点	140/200点	30/50点
		2年	140~180点	160/200点	40/50点	140~180点	160/200点	40/50点	140~180点	160/200点	40/50点	140~180点	160/200点	40/50点
		3年	160~200点	180/200点	50/50点	160~200点	180/200点	50/50点	160~200点	180/200点	50/50点	160~200点	180/200点	50/50点
Grade 6	2年	2年	140~180点	160/200点	40/50点	140~180点	160/200点	40/50点	140~180点	160/200点	40/50点	140~180点	160/200点	40/50点
		3年	160~200点	180/200点	50/50点	160~200点	180/200点	50/50点	160~200点	180/200点	50/50点	160~200点	180/200点	50/50点
		4年	180~220点	200/220点	60/60点	180~220点	200/220点	60/60点	180~220点	200/220点	60/60点	180~220点	200/220点	60/60点
学年	科目	学習到達目標												
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	
1年	英語	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	
	英語	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	
	英語	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	10年	11年	12年	
学年	科目	学習到達目標		到達目標										
		1年	2年	1年	2年									
1年	英語	1年	2年	1年	2年									
	英語	1年	2年	1年	2年									
	英語	1年	2年	1年	2年									

上段: CAN-DOリスト
中段: 3年間の英語学習プラン
下段: 学習到達目標を組み入れたシラバス

課題 ④

教員間の連携は進んでいるものの、個人や研究グループによる実践や成果を科内全体で共有することがまだ十分できていない。また、校内で公開授業や授業研究会を計画しても、多忙な中で英語科教員全員が参加できる状況を作ることが難しく、共同研究、共通認識という段階に至らない。

平成27年度 英語教育強化地域拠点事業における取組状況（高等学校）

1. 調査の目的

- 英語教育強化地域拠点における研究の取組状況を把握し、現時点の成果・効果や課題を分析した上で関係者が情報を共有し、強化地域拠点や研究指定校の今後の研究の充実に資する。
- 具体的な取組の状況について調査し、次期学習指導要領の改訂に向けた中央教育審議会における議論の参考とし、今後の施策の検討に資する。

2. 調査の対象・期間

※本事業は平成26年度より4年間実施予定

- 調査対象
英語教育強化地域拠点事業 研究指定校 46校／46校
- 調査期間
平成27年10月15日～平成27年10月27日
- 主な調査項目
 - ①小学校・中学校・高等学校の接続や一貫性を意識した取組に関すること
 - ②英語で行う授業及び発表、討論・議論、交渉等の言語活動の高度化に向けた取組に関すること
 - ③新たな授業指導・学習評価等を行うための教員研修の充実にに向けた取組に関すること等

3. 主な取組状況

(1) 小学校・中学校・高等学校の接続や一貫性を意識した取組

- 一貫した学習到達目標・指導計画の作成
半数をやや下回る高等学校で校種を超えて一貫した学習到達目標や指導計画を作成。
そのうち、ほとんどの高等学校が「小・中・高等学校一貫」の学習到達目標や指導計画を作成している。
- 校種間連携のための取組
ほとんどの高等学校が校種間の接続・連携のための取組を実施。
「情報交換」や「研修会・協議会」が主な内容。また、高校生が小学校の英語授業やモジュールの時間に指導をしたり、小学生を対象に英語を用いた交流会を実施したりする取組を行う高等学校もある。

(2) 英語で行う授業及び言語活動の高度化に向けた取組

- 多くの高等学校が英語の授業の半分以上を英語で行っている。**
また、ほとんどの高等学校が英語による発表、討論・議論、交渉等の言語活動の高度化に向けた取組を実施。「スピーチ」「プレゼンテーション」「ディスカッション」「ディベート」等が主な内容。

(3) 新たな授業指導・学習評価等を行うための教員研修の充実にに向けた取組

- 多くの高等学校で新たな指導等を行うための教員研修を充実させている。**
「有識者等による指導・助言を中心とした研修会」「学校種ごと（高等学校間）の研修会」「各校種合同の研修会」等が主な内容。

4. 主な調査結果分析

(1) 小学校・中学校・高等学校の接続や一貫性を意識した取組

- 40.9%の高等学校が校種間で一貫した学習到達目標や指導計画を作成していると回答。うち、5.6%の高等学校が「中・高等学校一貫」の学習到達目標や指導計画を作成し、94.4%の高等学校が「小・中・高等学校一貫」の学習到達目標や指導計画を作成している。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- 中学校での学習到達目標を知ることにより、中・高間の英語指導の整合性を意識できるようになった。また、中学校での指導に基づいた学習到達目標の明確化に伴い、授業や試験作成において、ねらいが安定し、ぶれにくくなっている。
- 学年ごとに学習到達目標が設定されていることで、共通のねらいが明らかになり、取組内容にばらつきが起こらない。また、中学から高校へのつながりを意識し、自己紹介、行事、環境、日本の伝統文化、夢などを単元における共通のテーマとして組み入れることで、見通しをもって指導ができるようになった。
- 小・中学校との接続を意識し、12年間一貫した学習到達目標を作成したことで、それぞれの校種で目標を共有したつながりのある指導が可能となった。

〈課題〉

- 連携している小・中学校の拠点校で作成しているCAN-DOリストの形式による学習到達目標を分析し、4技能別に設定するだけでなく、「言語の使用場面」や「言語の働き」も踏まえて、小中高一貫した学習到達目標を作成する必要がある。
- 「どのような英語力を生徒に身につけさせたいか」について、指導者間での具体的な「共通言語」が不在である。（経験則に基づく認識や日頃の指導や観察から得られる個人レベルのイメージを一般化する程度にとどまっているのが現状である。）

(2) 小学校・中学校・高等学校の連携に関する取組

- 多くの高等学校で、**情報交換（100%）**、**研修会・協議会等（90.9%）**、**授業参観（86.4%）**による校種間の連携が行われている。
- 22.7%の高等学校が相互の乗り入れ授業※¹**を行い、**13.6%の高等学校が交流授業※²**の取組を行っている。

※¹「相互の乗り入れ授業」: 教員が異校種での児童生徒を指導する授業のこと。

※²「交流授業」: 学校種の異なる児童生徒が同じ授業を受けること。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- 教員やALTが小・中学校でティーム・ティーチング（TT）をした経験を教科会議で共有したり、小・中学校で使用する教材のスク립トをALTが作成するなどして、小・中の現状や指導内容を意識するようになった。また、実際に小・中でTTをしたことで、**高等学校が果たすべき役割などが一層明確になった**。今後も**変化し続ける英語教育に対して、敏感かつ柔軟に対応していく心づもりができることが何より大きい効果であると**感じている。
- 中学→高校、高校→中学への双方への具体的要望について月1回意見交換を行うとともに、小・中・高での相互授業参観、中・高での協同授業が実施できた。こうした**小・中・高の協力関係により、地域で統一のパフォーマンステストを実施できる体制を作ることができた**。
- 小学校、中学校との授業研究会等を通じて、**指導法についての情報交換が活発になった**。それにより、ペア・ワークやグループ・ワークの形態やクラスルーム・イングリッシュによる指示に関しては小・中・高の間にそれほどの差異はなく、**集団を適切に動かす指示や補助教材の有効な提示等は小学校の授業においても十分実施できることが分かった**。

〈課題〉

- 小・中学校で**目指す英語力と、高校での目標を連動させる必要がある**。生徒自身が高校入学後、よりスムーズに高校での英語学習に取り組めるようにするとともに、高校側でも入学時に必要な英語スキルをよりの確に把握し、指導に生かす必要がある。
- 小・中・高の連携については、授業公開、情報・意見交換など有益な取組が始まったが、**三者の「指導のつなげ方」についての研究が今後非常に重要であり、将来の日本の英語教育の発展の鍵をにぎる要素であるとますます感じているところである**。

〈3〉英語による授業及び言語活動の高度化に向けた取組

- 73.9%の高等学校が授業の半分以上を英語で行っている。
- 80.4%の高等学校が言語活動の高度化に向けた取組を行っている。
うち、94.6%の高等学校が「スピーチ」、86.5%の高等学校が「プレゼンテーション」、54.1%の高等学校が「ディスカッション」に取り組んでいる。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

- 授業の中で毎日、相当な量のスピーキングを行わせている。スピーキングでは言いたいことが伝わるかどうかを絶対的に重視して、文法的な誤りを気にする必要はないというスタンスで指導している。毎日話させていることは、2～3年生で行うディベートやディスカッションなどの高度な言語活動への確実な基礎作りとして大変有効である。
- スピーチや発表などの活動においては、教員による授業観察の他に、生徒による自己評価を参考にしている。評価シートを活用することで、生徒のモチベーションを高めることができた。また、インタビューテストの形式で、Q & Aによる受け答えやスピーチ、発表などを個別に評価する方法が定着してきた。
- 授業の中で、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなどの言語活動をなるべく多く行い、生徒が情報や自分の考えを適切に伝える場面を全学年通して取り入れることができるようになった。
- スピーチやプレゼンテーションのための教材で基本の型を示したことで、生徒自身に話し方のパターンを定着させつつある。

〈課題〉

- 高度な言語活動（プレゼンテーション・ディベート・ディスカッション）につなげるために、その土台となる即興性（相手の言ったことを聞いたあとすぐに相手に質問をしたり、相手の質問にすぐに返答できる力）をいかに養うか考えていく必要がある。
- 今後、本当の意味でスピーキングを中心としたコミュニケーション能力を育てていくためには、授業と評価をさらに緊密に関連づけ、評価の質と量を高めていく必要がある。これは校内の取組だけでは限界があり、外部試験の利用も含めて大学入試の中にスピーキングテストが本格的に取り入れられていくことを強く望みたい。

(4) 新たな指導等を行うための教員研修の充実に向けた取組

- 73.9%の高等学校が新たな指導等を行うため、教員研修を充実させている。
うち、58.8%の高等学校が「有識者等による指導・助言を中心とした研修会の実施」、44.1%の高等学校が「学校種ごと（高等学校間）の研修会等の実施」、26.1%の高等学校が「各校種合同の研修の実施」に取り組んでいる。

〈成果・効果〉と〈課題〉（自由記述抜粋）

〈成果・効果〉

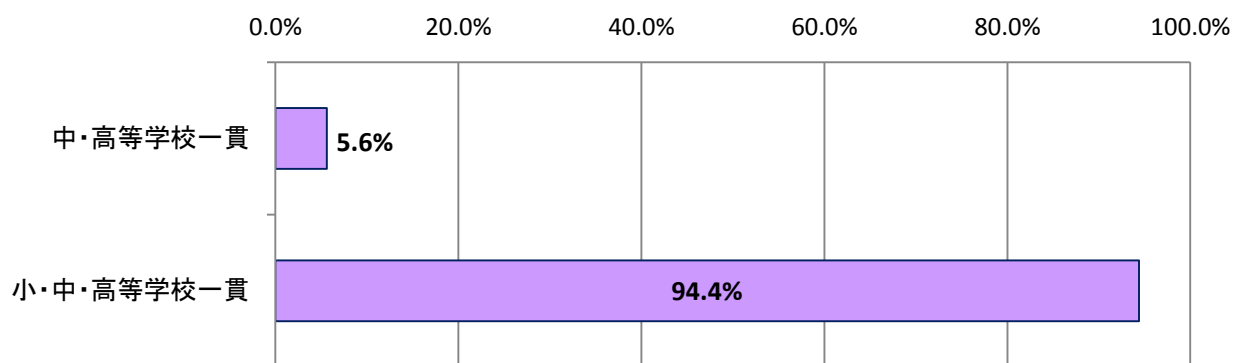
- 公開授業を行ったり授業参観したりすることにより、自分の授業をより客観的に捉える機会が得られた。また、授業について、外部からの様々な助言や指摘、アイデア等に触れることができる研修会は、授業を改善する貴重な機会となっている。
- 研修会で様々な先生方と議論する中で、生徒中心の授業である必要性とその手法を学び、評価方法についても議論する機会が増えた。
- 中・高合同の研修会によって中学・高校間の評価規準や評価方法の違いが明らかとなり、意見交換を行うことができた。また、外部有識者による研修会では大学の教授からの指導を受け、現状の課題の把握や改善の手立ての検討を行うこともできた。
- 外部機関や有識者による教員研修を積極的に行うことで、現在の小学校や中学校における取組や生徒の実態を把握することができる。また、そのことによって、学習到達目標と照らし合わせながら教員間で問題意識を共有、日々の指導改善を行うことができていく。

〈課題〉

- それぞれの教員が多く業務を抱えて多忙であり、共有した課題や改善点を日々の授業に活かしていくために、教員間で議論できる研修会を実施する時間の確保が困難になっている。
- 各技能を評価するための活動を学年間で共有しているが、共有した指導・評価方法に安住せず、常にその妥当性について教科内で確認し、改良を検討する必要がある。

1. 40.9%の高等学校が校種間で一貫した学習到達目標や指導計画を作成している

1.校種間で一貫した学習到達目標や指導計画を作成していると回答した高等学校の取組の詳細



〈その他の内容〉

- ・高校生が小学校の英語の授業やモジュールの時間に指導をする。
- ・市教育委員会が中心となり、一貫した学習到達目標や指導計画の作成に向けた連携を準備している。
- ・高等学校の生徒(国際交流部)が小学校を訪問し、6年生全員を対象に英語を使った交流会を実施している。
- ・拠点事業に指定されている小学校、中学校での公開授業を参観した。

小学校・中学校・高等学校の連携に関する取組

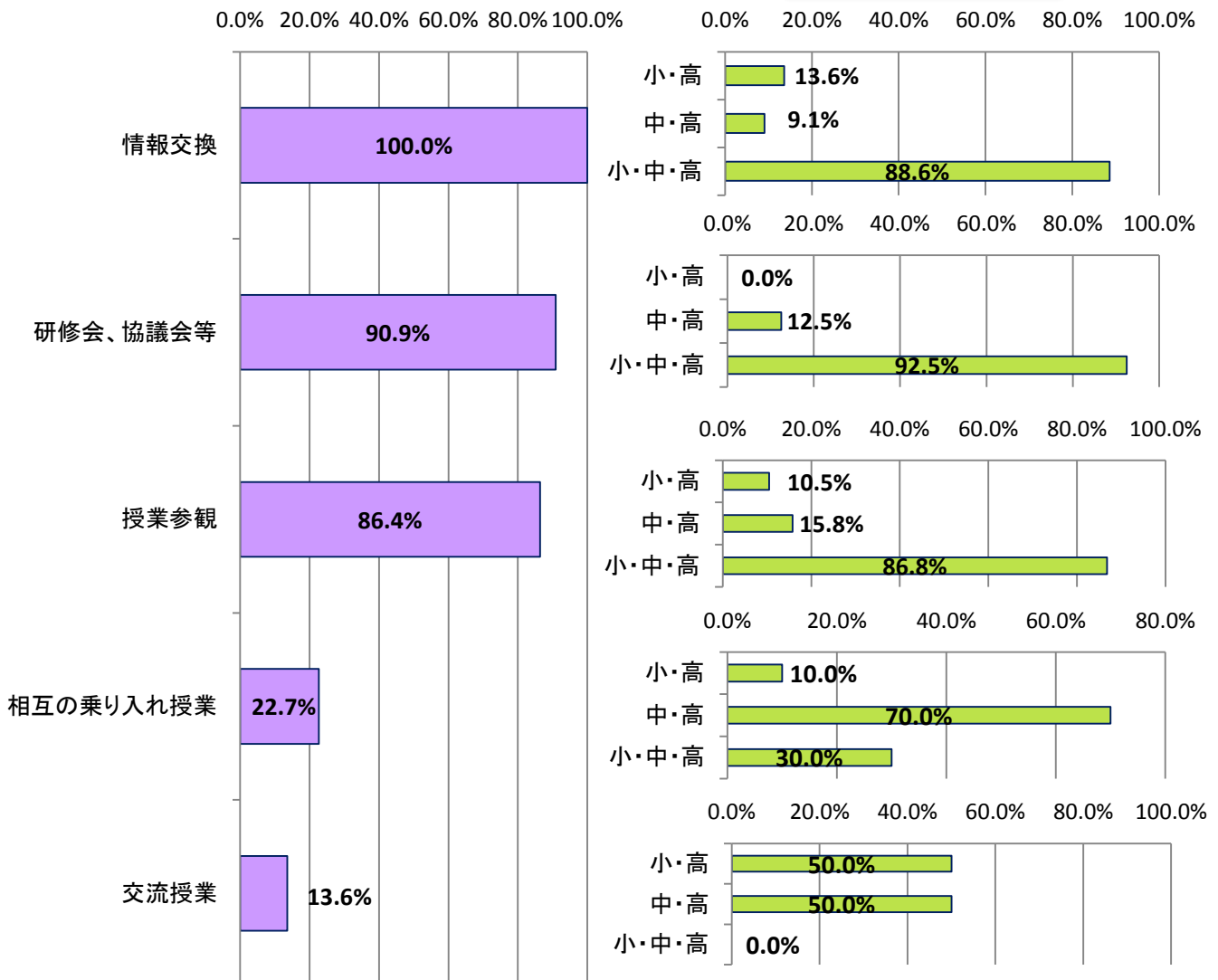
1. 95.7%の高等学校で校種間の連携に関する取組が行われている
2. 上記1のうち情報交換（100%）、研修会・協議会等（90.9%）、授業参観（86.4%）による校種間の連携は多くの高等学校で行われている
3. 上記1のうち22.7%の高等学校が相互の乗り入れ授業※1を行い、13.6%の高等学校が交流授業※2を行っている

※1「相互の乗り入れ授業」: 教員が異校種での児童生徒を指導する授業のこと。

※2「交流授業」: 学校種の異なる児童生徒が同じ授業を受けること。

Q. 小学校・中学校・高等学校の連携に関する取組をしている場合、具体的にどのような取組をしているか？

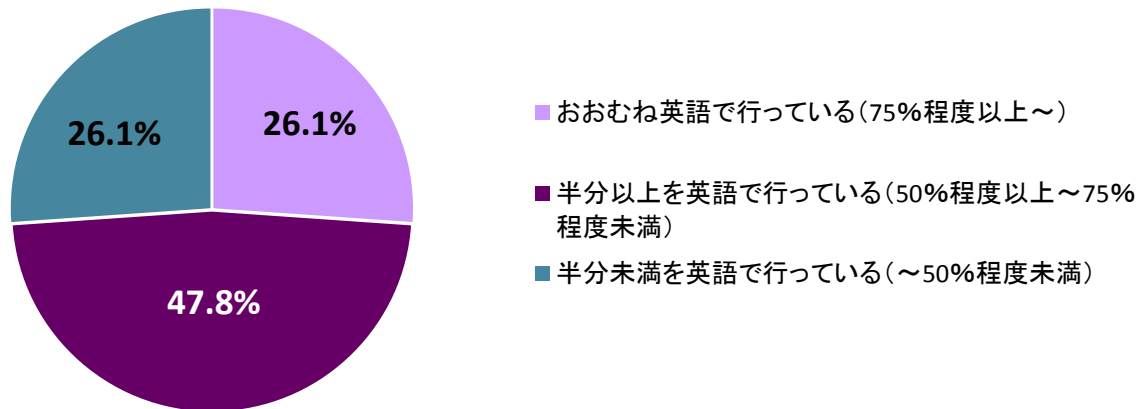
各項目の詳細



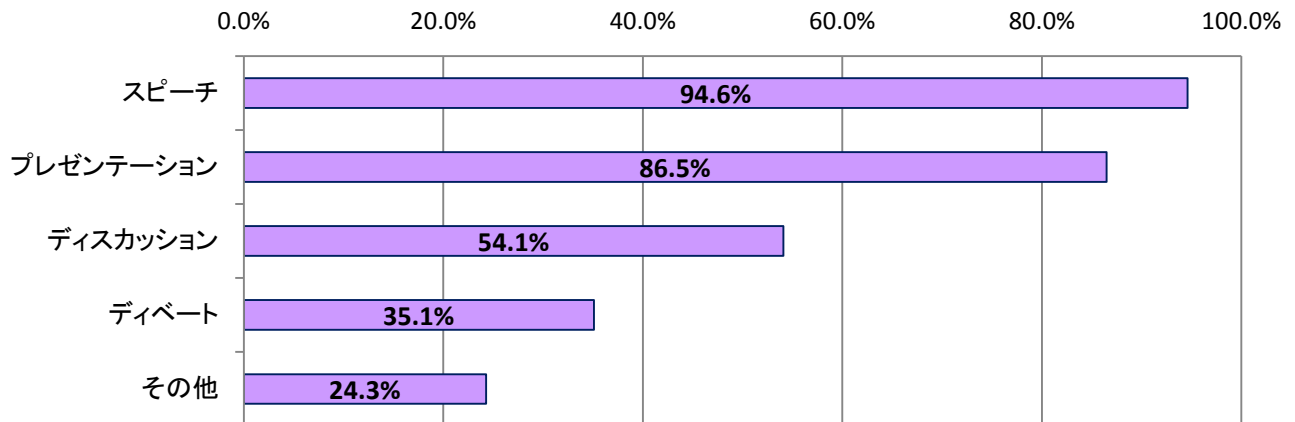
英語による授業及び言語活動の高度化に向けた取組

1. 26.1%の高等学校が英語の授業をおおむね（75%程度以上）英語で行っており、47.8%の高等学校が英語の授業の半分以上を英語で行っている（合計73.9%）（参考：平成26年度英語教育実施状況調査では「おおむね英語で行っている」と「半分以上英語で行っている」の合計が49.1%）
2. 80.4%の高等学校が言語活動の高度化に向けた取組を行っている
3. 上記2のうち、94.6%の高等学校が「スピーチ」、86.5%の高等学校が「プレゼンテーション」、54.1%の高等学校が「ディスカッション」に取り組んでいる

Q.授業における教員の発話はどの程度英語で行っているか？



Q.言語活動の高度化に向けた取組をしている場合、どのような取組を行っているか？



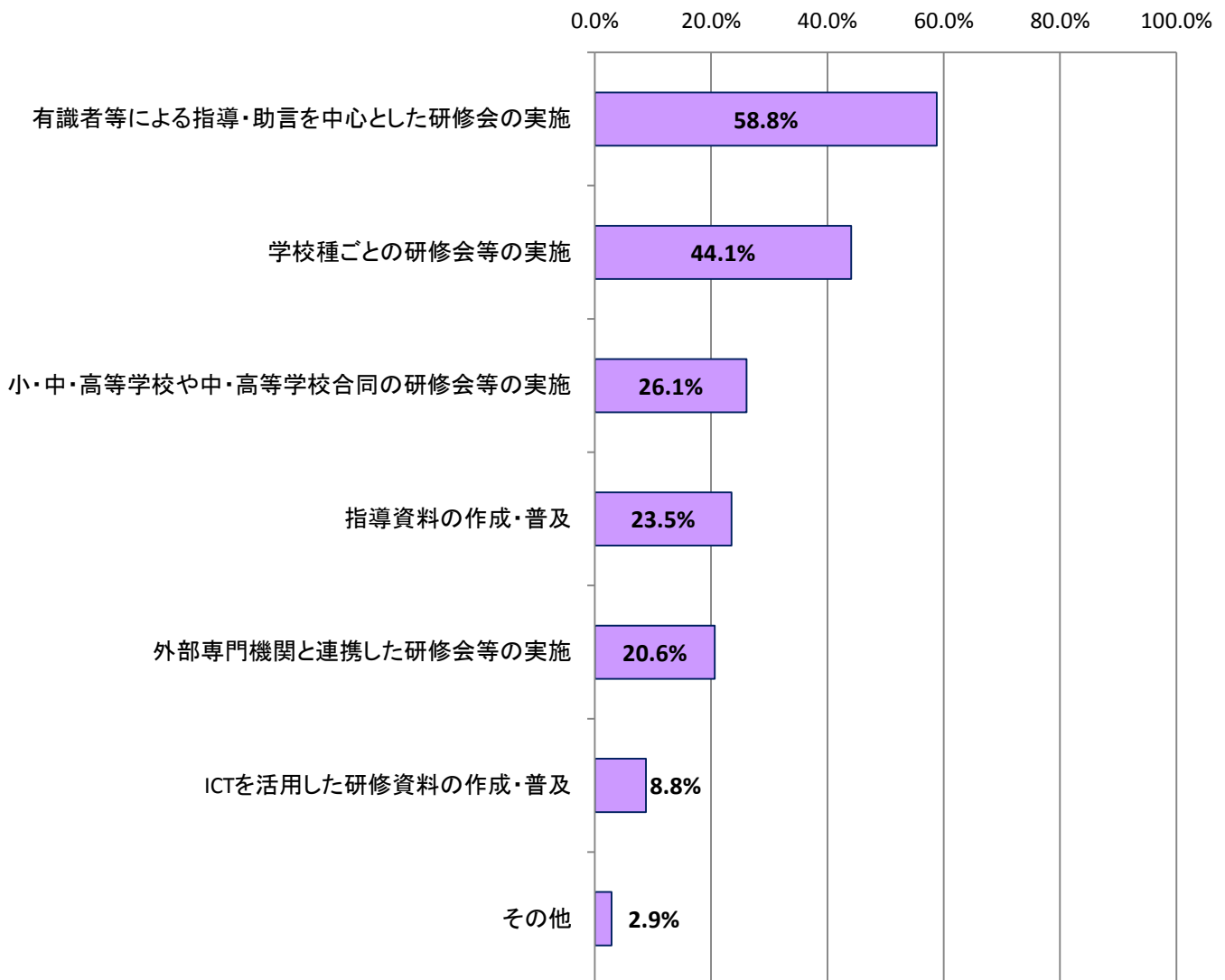
〈その他の内容〉

- ・パフォーマンステスト
- ・スキット
- ・英語による演劇
- ・Show and Tell
- ・学習した表現や構文等を使ったスキットやインタビューを、ペアやグループで発表する。
- ・2年生の「情報」と協力し、情報発表会を英語で実施する予定。
- ・パラグラフ・ライティング、エッセー・ライティング、サマリー・ライティング

新たな指導等を行うための教員研修の充実にに向けた取組

1. 73.9%の高等学校が新たな指導等を行うための教員研修を充実させている
2. 上記1のうち58.8%の高等学校が「有識者等による指導・助言を中心とした研修会の実施」、44.1%の高等学校が「学校種ごと（高等学校間）の研修会等の実施」、26.1%の高等学校が「各校種合同の研修の実施」に取り組んでいる

Q.「教員研修を充実させている」と回答した場合、具体的にどのように充実を図っているか？



〈その他の内容〉

・すでに県内に小・中・高連携を意識した研修や教材があるので、新たなものを立ち上げ実施するのではなく、意識して参加、研鑽を積み、参加した者が教科内で情報を伝えるようにしている。